

# 持続するアートプロジェクトの条件とは —なおえつうみまちアートの事例による—

Conditions for Sustained Art Projects  
— A Case Study of Naoetsu Umimachi Art —

文化政策論／論文

地域キュレーションコース

上野 聡美  
Satomi Ueno

## ●研究目的

近年、アートを用いた地域活性化の取り組みであるアートプロジェクトが全国的に増加している。アートプロジェクトの開催は、多くの効果を生み出す一方で、地域住民との良好な関係の構築など開催にあたり問題点が内包しており、継続的な開催には課題解決に向けた対策や工夫が不可欠である。そこで、本論文では、2021(令和3)年に初開催され、大幅な運営体制や企画内容の変更を行いながらも継続開催となった、新潟県上越市直江津地区のアートプロジェクト、「なおえつうみまちアート」の実情を多様な面からそれぞれ比較し、そこから持続するアートプロジェクトに必要な条件について明らかにすることを目的とする。

## ●方法

なおえつうみまちアートの取り組み全体について把握するために、行政、実行委員会などの各主体にヒアリングを行う。また、上越市や市民といった本プロジェクトに関係する方への聞き取りや参与観察より、プロジェクトを評価する。そして、初年度と次年度の経緯や目的、運営体制、合意形成等の具体的な取り組み、効果などを比較し、なおえつうみまちアートの今後の方向性や持続に必要な条件について検討する。

## ●調査対象

なおえつうみまちアートとは、新潟県上越市直江津地区で2021(令和3)年、2022(令和4)年に開催されたアートプロジェクトであり、直江津地区初のアートプロジェクトである。初年度である2021(令和3)年と次年度の2022年(令和4)年では実施主体が異なり、事業規模や内容も大幅に変更する中で、名前や大まかな開催エリアなどは踏襲しながら継続開催された。



図1 なおえつうみまちアート ロゴ (上越市提供)

## ●比較研究

初年度から次年度にかけて引き継がれたもの、反対に変更されたことについて、ヒト(人材)、カネ(資金)、モノ(企画)、コト(運営)の4点に焦点を当てて比較を行った。これらの比較からなおえつうみまちアートには、初年度から次年度にかけて、運営主体が行政や企業から地域住民へと変更していることや、金銭や企画内容等の事業規模の面などにおいて大きな相違点があることが明らかとなった。一方で、コンセプトや一部目的など変更されずに引き継がれた点が存在し、これらがアートプロジェクトの継続に有効に作用していたことも明らかとなった。

## ●結論

持続的なアートプロジェクトの開催には、①専門人材の活用や潜在的人材の掘り起こし、②組織運営に必要な財源確保、③適切な展示や企画の作成、④ビジョン構築と明確なコンセプトの検討、が必要な要素として考えられる。また、これらの条件を構築するためには、丁寧な合意形成を行うこと、コンセプト等の共通認識の継承すること、ならびに開催地が強固な地域コミュニティを保有していることも重要な要素であり、アートプロジェクトを開催するにあたり検討するべき事柄であると考察する。

今後、開催地の特性を鑑み、地域固有のものとして根付いていくことで、地域内外を問わず、あらゆる人達に対して地域の魅力を伝え、地域とともにアートプロジェクトも持続、発展していくことが期待される。

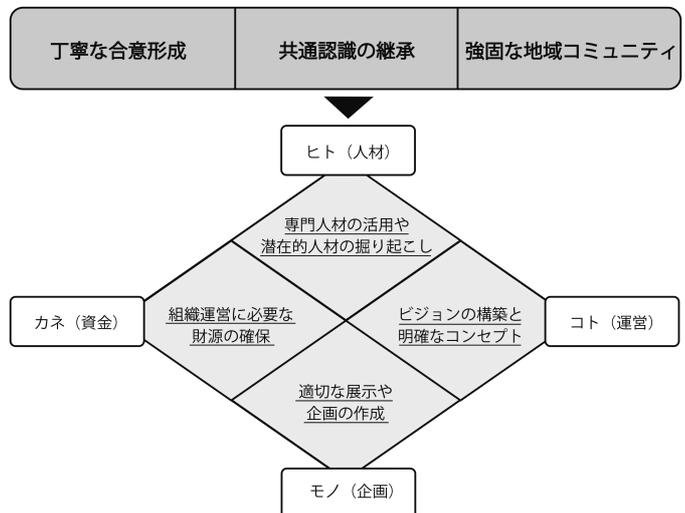


図2 持続するアートプロジェクトの条件 (筆者作成)

持続するアートプロジェクトの条件とは  
— なおえつうみまちアートの事例による —

Conditions for Sustained Art Projects  
— A Case Study of Naoetsu Umimachi Art —

2019 年度入学

上野 聡美  
Ueno, Satomi

2023 年 1 月 16 日提出

## 内容

第1章	はじめに	5
1-1	研究背景	5
1-2	先行研究	6
1-3	研究の目的	6
1-4	研究の方法と対象	7
第2章	アートプロジェクトとは	8
2-1	定義	8
2-2	目的と効果	9
2-3	歴史的な経緯	9
2-4	分類	10
2-5	小括	11
第3章	なおえつうみまちアートの取り組み	12
3-1	なおえつうみまちアートとは	12
3-2	直江津の概要	12
3-3	なおえつうみまちアート（うみまち 2021）	14
3-3-1	概要	14
3-3-2	運営体制	18
3-3-3	企画内容	20
3-3-4	事業予算	22
3-4	みんなでつなごう なおえつうみまちアート 2022（うみまち 2022）	23
3-4-1	概要	23
3-4-2	運営体制	26
3-4-3	企画内容	27
3-4-4	事業予算	31
3-5	小括	31

第4章 うみまち 2021 と うみまち 2022 の比較.....	33
4-1 ヒト（人材）の比較.....	33
4-2 カネ（資金）の比較.....	37
4-3 モノ（企画）の比較.....	38
4-4 コト（運営）の比較.....	39
4-5 小括.....	40
第5章 考察.....	41
5-1 継続・発展に必要な要素.....	41
5-2 小括.....	43
第6章 おわりに.....	45
謝辞.....	45
参考資料.....	46

## 第1章 はじめに

### 1-1 研究背景

全国的に地域衰退が進む中で、アートを用いた地域活性化の取り組み事例が増加している。代表的なものでは、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟県)、「瀬戸内国際芸術祭」(岡山県、香川県)、「奥能登国際芸術祭」(石川県)などが挙げられる。これらのプロジェクトには、自治体などが巨額の予算を費やし、広大な範囲に作品を展示している。その結果、開催年には多くの来訪者によって、経済的効果や社会的効果を生んでいる。

こうした美術館やギャラリー内に限定されず、さまざまな場所で作品が展示される取り組みはアートプロジェクトと呼ばれ、日本では1990年頃から地域活性化の一手法として盛んに行われるようになってきた。アートが地方活性化の手段として用いられる理由としては、アートの自由度が挙げられる。アートは写実的な古典美術から現代アートまで数多くの種類があり、どこまでを芸術・アートの範囲とするか人によって見解が異なる。それが、むしろ作品から特別な個性を出しやすくなり、地域としての特徴づけに利用されやすいという利点に繋がっている。

このようにアートと地域活性化には親和性がある一方で、アートプロジェクトは実施にあたり、特別な専門性が必要とされるため、地域外のアーティストやキュレーターを巻き込んで行われる事が多く、地域住民との良好な関係の構築も必要となる。これらの問題点以外にも、アートプロジェクトを継続的に開催するには多くの課題があり、現在、長期的に続いているものも継続するためには多くの対策や工夫が取られている。

今般、著者の地元である新潟県上越市直江津地区でも2021(令和3)年に「なおえつうみまちアート」という新しいアートプロジェクトが開催された。しかし、会期後の市民に対する調査では、プロジェクトの意義や効果に対して批判的な意見が多く見受けられた。昨今の新型コロナウイルス流行による影響も考慮すべきであるが、多くは地域と外部の関係性や経済効果に対する批判である。上越市では、こうした意見を受け、事業内容を再検討した結果、2022(令和4)年度は財政的な支援は行わない決定がなされた。しかし、公的な財政支援が打ち切られたが、有志による実行委員会が立ち上がり、その名前を引き継ぎながら開催した。なおえつうみまちアートは、実施内容を変更し、規模を縮小しながら2022(令和4)年度に市民主体のアートプロジェクトとして第2回が実施されることとなった。

著者は、第1回の2021(令和3)年のなおえつうみまちアートにボランティアで参加し、アートプロジェクトの意義を高く評価していたが、次年度の行政による財政的な支援がなくなったことで継続は不可能だと考えていた。しかし大幅な運営体制や企画内容の変更を行いながら、なおえつうみまちアートの名を残し、事業が継続することができた。なぜ継続することが可能だったのだろうか。この継続に至った経緯や運営体制、合意形成や市民との関わりから生まれた効果などを検証することで、アートプロジェクトが持続するための要

素を明らかにできるのではないか、そう考えて調査を行うこととした。

## 1-2 先行研究

アートプロジェクトに関する研究は、これまでに数多く実施されている。その多くは、1つのアートプロジェクトに焦点を当て、立ち上げから会期中の発生事実を振り返り、アートプロジェクトの持つ利点や改善点について論じるものである。

長畑・枝廣(2010)は直島でのアートプロジェクトを事例として取り上げ、現代アートによる地域再生の取り組みの有用性に関して論じている。この研究では、アートプロジェクトによる地域再生を行うためには、明確なミッションやコンセプトが必要であり、総合プロデューサーやアートディレクターの力量が重要になってくることを明らかにした。

また田島(2014)は、小規模地域アートイベントを年間予算が1,000万円未満の地域アートイベントと定義し、イベントの有用性と持続性について、有用性をモノ、持続性をヒトの観点から論じている。その中で、田島自身が創設者である「みなとメディアミュージアム(MMM)」を調査対象とし、コミュニケーション構造や関係者同士の関わりの変化をモデル化し、イベントの持続性に人の関わりが重要であることを明らかにしている。

さらに磯貝(2019)は、愛知県三河湾の佐久島で行われる「三河・佐久島アートプラン21」を取り上げ、アートプロジェクトの現状や今後の展望について論じている。現状では、観光客の来訪により賑わいが創出した一方で、少子化や高齢化によって島のコミュニティが急激に衰退しており、アートと関わりの少ない高齢者がアートの理解を深めない限り、アートプロジェクトによる本格的なまちおこしは困難であることを明らかにしている。

一方アートプロジェクトに関して、プロジェクトの創成期の取り組みに焦点を当て、その運営に必要となるノウハウや要素などを明らかにしているものはほとんどない。また今回の上越市直江津地区のように、同一地域において、財政的な支援がなくなった場合の住民行動の変化など、社会実験的な要素を含んだ研究は存在しない。そこで第1回と第2回のなおえつうみまちアートの事例の比較から、アートプロジェクトを持続的に行う上で重要となってくる条件や要素について検討していく。

## 1-3 研究の目的

このようにアートプロジェクトに関しては、多くの研究がされている一方で、なおえつうみまちアートは、プロジェクトの創成期である第1回と第2回に、運営資金や運営形態、企画内容を大幅に変えながら、継続に至った稀有なケースである。本研究は、なおえつうみまちアートの第1回と第2回の比較から、開催に至った経緯や運営体制を考察し、持続的なアートプロジェクトに必要な要素の抽出を試みる。特に、来場者数や経済的効果などの定量的な評価項目に加え、社会的効果や合意形成の過程など、目に見えない定性的な観点から

も検討する。そして、持続的なアートプロジェクトの開催を考えている団体のみならず、今後新たにアートプロジェクトの立ち上げを検討している団体などに示唆を与えることを目的とする。

#### 1-4 研究の方法と対象

本研究ではまず、なおえつうみまちアートの実施記録から立ち上げの経緯や目的、運営方法、成果などを整理し、なおえつうみまちアートの取り組み全体について把握する。関わる主体によって見解の相違も予想されることから、行政、実行委員会などの各主体にヒアリングを行う。また、本プロジェクトの関係者への聞き取りや参与観察により、プロジェクトを評価、検証する。特に、本プロジェクトの運営会議への参加やヒアリング調査から、経済面だけでなく、社会的な利点や効果があったのか確認する。

調査対象は、2021（令和3）年の第1回と2022年（令和4）年の第2回のそれぞれのプロジェクトに対して行い、経緯や目的、運営体制、合意形成等の具体的な取り組み、効果などの比較を通じて、なおえつうみまちアートの今後の方向性や持続に必要な条件について検討する。

## 第2章 アートプロジェクトとは

### 2-1 定義

本節では、アートプロジェクトがどのように定義されているのか述べる。熊倉（2014）は、「現代芸術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動」また、「作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象を関わりながら展開される」と述べている<sup>1</sup>。さらに、松尾（2015）は、「作家やアーティストがプロジェクト展開の地域や場に依拠し、住民とその場の価値を共創的に共有する参加型の営み全般を意味する芸術文化事業」と述べ、ゆえに「パブリックアート＝芸術（アート）というルーツを、場や作品と人を繋ぎながら社会の中で有効活用する共同的な地域創造的文化事業でもある」としている<sup>2</sup>。

また熊倉は、アートプロジェクトの特徴を以下の5点と指摘する<sup>3</sup>。

1. 制作のプロセスを重視し、積極的に開示
2. プロジェクトが実施されている場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック
3. さまざまな波及効果を期待する、継続的な展開
4. さまざまな属性の人びとが関わるコラボレーションと、それを誘発するコミュニケーション
5. 芸術以外の社会分野への関心や働きかけ

本稿では上記の主張に鑑み、アートプロジェクトを、「地域や場の持つ価値や魅力について現代アートを用いて表現し、作家や住民などさまざまな新しいコミュニティを作り出すとともに地域再生等の社会的効果をもたらす活動」と定義する。

---

<sup>1</sup> 熊倉純子監、菊池拓児・長津結一郎（2014）「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」水曜社、p9

<sup>2</sup> 松尾豊（2015）「パブリックアートの展開と到達点 - アートの公共性・地域文化の再生・芸術文化の未来 -」水曜社、p187

<sup>3</sup> 同上、2014、p9

## 2-2 目的と効果

次に、アートプロジェクトの目的と効果について先行研究からまとめていく。通常のプロジェクトでは、様々な目的が設定され、その達成を目指して事業が行われる。そして、アートプロジェクトの場合、多くの来場者による経済効果を目的に開催されることが多い。ただし本節では、地域住民がアートプロジェクトに触れることで生まれる効果に焦点を当てる。熊倉は「既存の回路とは異なる接続/接触のきっかけとなることで、新たな芸術的/社会的文脈を創出する活動」<sup>4</sup>と述べ、アートプロジェクトの地域における役割について言及している。また、古賀(2020)は、「アートイベントの開催や文化施設の建設でまちが活性化するものではなく、その地域で暮らす人々が地域への愛着や誇りを胸に、地域のあるべき姿を真剣に語り合い行動することこそ重要」<sup>5</sup>と述べている。

すなわち、アートプロジェクトが地域にもたらす効果とは、地域住民が地域の価値を再認識し、新たな価値を創造する機会を提供することである。

## 2-3 歴史的な経緯

本節では、なぜアートプロジェクトが実施されるようになったのか、アートプロジェクトの歴史について述べる。

市民社会の到来により、社会と美術を繋ぐ役割として19世紀に誕生した美術館であるが、20世紀にかけて次第にホワイトキューブを理想とする展示へと変わり、社会に開かれた空間が閉鎖的な存在へと変貌していった。この状況に対し、異議申し立ての意味を込めて欧米諸国において脱美術館の動きが盛んになっていった<sup>6</sup>。

その中で、日本でもアートプロジェクトの前身として、1950年代～1970年代にかけて野外での作品展示が行われるようになる。50年代以降の美術運動を皮切りに、ホワイトキューブへの反発による脱美術館の動きが見られ、通常、美術館内で行われてきた展覧会が、野外や美術館以外の施設で行われることが増えた。このことは、新たな美術制度や表現形態が生まれる要因となった。そのような潮流で、1980年代～1990年代の前半にかけて、場所への帰属性や置かれる場所の特徴を活かした、作品の性質を表す「サイト・スペシフィック」という概念が広まった。その結果、作品の置かれる場の歴史や社会性を取り入れた表現やプロジェクトが行われ、「空間」から「場」へと概念が拡張していく<sup>7</sup>。また、1990(平成2)

---

<sup>4</sup> 熊倉、前掲書、2014、p17

<sup>5</sup> 古賀弥生(2020)「芸術文化と地域づくりーアートで人とまちをしあわせにー」九州大学出版会、p7

<sup>6</sup> 荻原康子・熊倉純子(2001)「社会とアートのえんむすび1996-2000：つなぎ手たちの実践」ドキュメント2000プロジェクト実行委員会、p12-14

<sup>7</sup> 同上、2014、p9

年の企業メセナ協議会発足に加え、国も芸術振興基金を設立することで、文化に対する支援体制が変化し、文化の専門機関以外でも助成金を受ける可能性が広がった。また好景気の時代には、地方自治体の文化に対する関心が高まり、文化施設の建設や野外彫刻の設置も盛んになった。熊倉は「こうした価値観の変化の中で、芸術を芸術としてのみ考えるのではなく、まちづくりなど他分野と結び付き、社会の仕組みへ働きかけるアートプロジェクトが生まれ始める」<sup>8</sup>と述べており、アートプロジェクトは社会に働きかける活動体として盛んに行われるようになった。

さらにアートプロジェクトは、2000年代から全国各地で盛んに行われるようになり、宮本(2018)は「現代アート作品の制作・設置を通じて、自然や景観、歴史などその地域独自のさまざまな魅力を目に見える形で示していく取り組みは地域づくりの有力な方針として、注目を集め、2000年代以降プロジェクトの数は飛躍的に増加している」<sup>9</sup>と述べている。具体的な事例として、2000(平成12)年から新潟県十日町市・津南町にて開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」<sup>10</sup>では、新潟県の地域活性化事業の柱として北川フラム氏のディレクションにより開催され、現在も継続している。また、ベネッセアートサイト直島の一環として2010(平成22)年から開催されている「瀬戸内国際芸術祭」<sup>11</sup>など、大規模な日本特有のアートプロジェクトが全国各地で行われている。

## 2-4 分類

またアートプロジェクトは、運営主体や実施会場となる地域ごとに多くの特徴があり、松尾は以下のように分類している<sup>12</sup>。

### ① 実施主体の管理者や支援に基づく分類

- A：国家型プロジェクト
- B：自治体型プロジェクト
- C：NPO型プロジェクト

### ② 実施主体の目的に基づく分類

- A：文化資源・歴史遺産型プロジェクト
- B：教育・学習型プロジェクト
- C：総合文化型プロジェクト

---

<sup>8</sup> 熊倉、前掲書、2014、p20

<sup>9</sup> 宮本結佳(2018)「アートと地域づくりの社会学 直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造」昭和堂、i

<sup>10</sup> 大地の芸術祭ホームページ (<https://www.echigo-tsumari.jp/about/history/>) 参照

<sup>11</sup> ベネッセアートサイト直島 (<https://benesse-artsite.jp/about/history.html>) 参照

<sup>12</sup> 松尾、前掲書、2015、p180-184

③ 展開の場や地域に基づく分類

- A：文化都市創生型
- B：中山間地再生型
- C：離島・海洋活用型
- D：学校・美術館協働型
- E：病院・福祉施設活用型

④ 制作の中心者に基づく分類

- A：作家中心型
- B：協働型
- C：制作補助型

この多様な分類から、アートプロジェクトの開催には多くのアプローチが存在することが分かる。開催場所の持つ特徴や抱える課題、プロジェクト開催後にもたらされる効果などを検討し、より最適な運営を実現させることが期待され、多様な形式のアートプロジェクトの開催へと繋がっている。

## 2-5 小括

2章では、アートプロジェクトの定義やこれまでの歴史についてまとめてきた。アートプロジェクトとは、地域や場の持つ価値や魅力について現代アートを用いて表現し、地域にとって新しい存在を作り出すとともに、地域再生等の社会的効果をもたらす活動のことである。脱美術館の動きの中で、芸術作品の場所への帰属性が重要視されるようになり、社会に働きかける活動体としてアートプロジェクトは行われてきた。アートプロジェクトの開催には、主体や展開する場所の違いから多数の形式が存在し、近年、開催地が抱える地域課題の解決手段の1つとして全国各地で増加傾向にある。

このようなアートプロジェクトの実態を踏まえ、3章では、具体例として新潟県上越市直江津地区にて開催された「なおえつうみまちアート」を取り上げ、概要や詳細を論じていく。

### 第3章 なおえつうみまちアートの取り組み

本章では、新潟県上越市直江津地区にて2021（令和3）年に開催された「なおえつうみまちアート」と2022（令和4）年に開催された「みんなでつなごう なおえつうみまちアート2022」についてまとめていく。著者は、2021（令和3）年のなおえつうみまちアートに作品制作ボランティアとして参加し、活動の参与観察を行った。さらに上越市やなおえつうみまちアート実行委員会へのヒアリング調査、また、2022（令和4）年7月12日に実施されたうみまちミーティング3rdと同年12月8日に実施されたうみまちミーティング4thへ参加した。ヒアリング調査には、上越市企画政策部企画政策課の志賀陽一氏・丸山輝子氏・上石剛士氏及び、なおえつうみまちアート2022実行委員長の重原稔氏にご協力いただいた。上記の調査に加え、記録集や各種資料から、プロジェクトの概要と詳細についてまとめていく。

#### 3-1 なおえつうみまちアートとは

なおえつうみまちアートとは、新潟県上越市直江津地区で2021（令和3）年、2022（令和4）年に開催されたアートプロジェクトのことである。（以降、2021年度に開催されたなおえつうみまちアートを「うみまち2021」、2022年度に開催された、みんなでつなごう なおえつうみまちアート2022を「うみまち2022」と記載する）。直江津地区でのアートプロジェクトの開催は、なおえつうみまちアートが初である。ただし初年度である2021（令和3）年のうみまち2021と次年度の2022年（令和4）年のうみまち2022では実施主体が異なり、事業規模や内容も大幅に変更する中で、名前や大まかな開催エリアなどは踏襲しながら継続開催された。

#### 3-2 直江津の概要

まず、上越市直江津地区の概要について述べる。上越市は、人口185,089人（2022（令和4）年12月現在）、面積973.89km<sup>2</sup>、新潟県の南西部に位置する市である<sup>13</sup>。1971（昭和46）年に港湾と臨海工業地を有する直江津市と、教育と文化、地方行政の中心である高田市が合併し、さらに2005（平成17）年の平成大合併により周辺13町村を編入合併し、現在の上越市が誕生した<sup>14</sup>。市域の中央に流れる関川沿いに開けた平野部を山間部と海岸部が囲む、変化に富んだ地形や自然が特徴的であり、冬季には積雪が多く観測される。また、古くから交通の要衝として栄え、現在も重要港湾である直江津港や北陸自動車道、上信越自動車道の

<sup>13</sup> 上越市ホームページ（<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/shiminka/jinko.html>）

<sup>14</sup> （1985）「わが郷土上越 ―上越市の風土と生活―」新潟県社会科教育研究会・上越市中学校長会、p15 参照

ほか、北陸新幹線、えちごトキめき鉄道 妙高はねうまライン、日本海ひすいライン、JR 信越本線、ほくほく線などを有している（図1）。

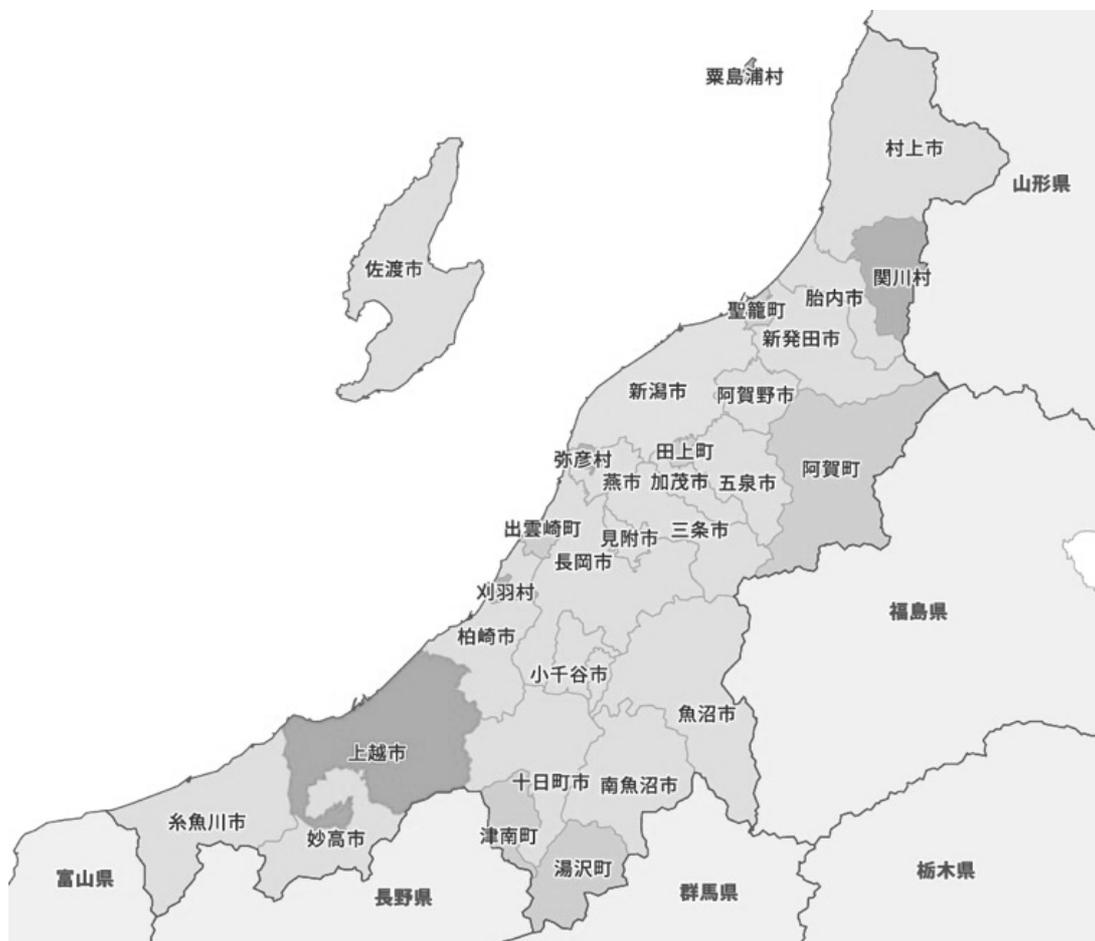


図1 新潟県地図

出典：Map-It マップイット | 地図素材サイトより

今回アートプロジェクトが開催された直江津地区は、上越市の北部の沿岸部に位置し、9,303人（2022（令和4）年4月）の人口を有する<sup>15</sup>。国鉄時代には信越と北陸の分岐点であったことや、佐渡と本土を結ぶ航路の拠点であり、重要港湾の直江津港があることから交通産業の中心地であると言える<sup>16</sup>。観光面では、県外客の利用も多いなおえつ海水浴場の他、近年では、2018（平成30）年にリニューアルオープンした上越市立水族博物館うみがたりや、2020（令和2）年にオープンした無印良品など新たな観光資源が増加している（図2）。

<sup>15</sup> 上越市ホームページ（<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/shiminka/jinko.html>）

<sup>16</sup> 渡辺慶一・中村幸一監（1971）「直江津の歴史」直江津市教育委員会、p8.106 参照



図 2 上越市地図

出典：上越市ホームページより

### 3-3 なおえつうみまちアート（うみまち 2021）

#### 3-3-1 概要

なおえつうみまちアート（うみまち 2021）は、上越市で初めて開催されたアートプロジェクトであり、新潟県上越市直江津地区にて 2021（令和 3）年 8 月 1 日から 9 月 26 日まで実施され、約 22,000 人が来場した。

うみまち 2021 の開催に至った経緯は、上越市・頸城自動車株式会社<sup>17</sup>・株式会社良品計画<sup>18</sup>（以下、頸城自動車、良品計画と略）の三者による「地域活性化に向けた包括連携に関する協定」の締結である。2019（令和元）年 5 月 12 日に現・直江津ショッピングセンター

<sup>17</sup> 上越市において乗合バス事業を中心とした各種事業を取り扱う企業

<sup>18</sup> 「無印良品」を中心とした事業を国内外に展開する企業

のある建物からイトーヨーカドーが撤退し、空き店舗状態になった。その際に、建物を所有している頸城自動車と、空き店舗への出店が決まった良品計画、さらに上越市の3者で直江津地区の賑わい創出の観点から交渉が行われ、2020（令和2）年1月27日に前述の協定が締結された。その後、2020（令和2）年12月まで直江津地域の活性化に関する会議が重ねられ、2021（令和3）年に開催予定であった大地の芸術祭との相乗効果の期待もあり、現代アートに着目したアートプロジェクトの開催が決定した<sup>19</sup>。その後、上越市による予算の確保などが行われ、2021（令和3）年4月よりうみまち2021の準備が開始した。

本アートプロジェクトは、テーマを「うみ／まち／ひと」とし、様々な地域資源と現代アートを組み合わせた作品の展示や参加型のイベントを実施し、直江津の歴史や文化、風土などまちの魅力を引き出し、地域の価値を見つめ直す機会を創り出すとともに、作品鑑賞に訪れた方々が、まちを巡る中で新しい出会いや交流することで、まちの賑わいを創出することを目的としている。

会場は、市が所有している建物や観光施設を候補として提示し、直江津の特徴的な建物や地域資源の含まれる場所を選出した（表1）。

表1 会場の選出理由（抜粋）

場所	理由
ライオン像のある館 （旧直江津銀行）	歴史的な価値を持つ地域資源であるが、普段、町内の人も訪れない建物のため
安国寺通り特設会場	空き家の有効活用により、商店街への人の流れを創出するため
直江津屋台会館	直江津で行われる祇園祭の山車を管理しており、直江津に縁が深いため

出典 上越市へのヒアリング調査にもとづき著者作成

会場の詳細は図3の通りである。上越市の中心を走る関川河口の左岸に位置し、直江津の中心市街地から日本海まで、バラエティに飛んだ会場設定がなされている。図3下部の直江津駅から最も遠い、海沿いのC：船見公園周辺海岸会場までの距離は約1.1kmであり、どの会場も駅から徒歩15分以内で訪れることができる。また、なおえつうみまちアート鑑賞ルートは、直江津のまちなかを囲うようなコースになっており、合計約3.3kmの道のりは歩いて鑑賞するのに適した距離であると考えられる。このなおえつうみまちアート鑑賞ルートは、来場者に直江津全体を回遊してもらうきっかけとなり、町全体の賑わい創出に繋がった。加えて、海岸に会場があることにより、日本海に面している特徴を前面に出すことに繋がり、直江津の住民にとって当たり前となっていた海や夕日という資源を再認識させ

<sup>19</sup> ただし大地の芸術祭は2022（令和4）年に開催が延期された。

る結果となった。会場周辺にはロゴマークを使用した誘導サインやペイントがされ、開催のアピールを行った。（写真1、2）

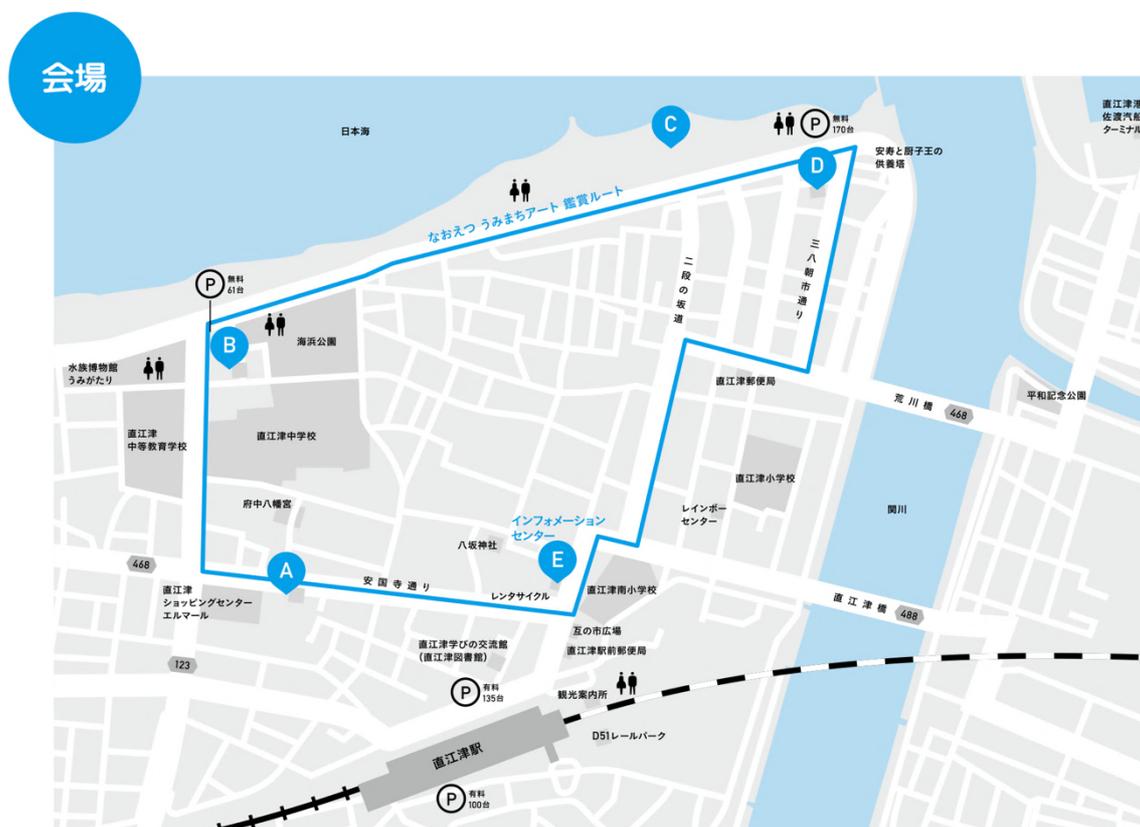


図3 なおえつうみまちアート 会場

出典：なおえつうみまちアート 記録集より

写真1 会場誘導サイン



出典：著者撮影

写真2 ロゴが使用された会場周辺の様子



住民への周知では、2021年（令和3）年7月12日に市民説明会を開催し、合意形成を図った。市民説明会では、直江津地区を中心とした市民に対し、説明や質疑応答を行った。これに加え、6月から7月に町内会の回覧板等を活用し、イベント開催の告知を行なった。また、実行委員会に直江津地区の関係者（商店連合会会長、町内会長など）が加入することで、運営を担う上越市と頸城自動車、良品計画の3者が、地域住民との意見交換が行いやすい状況を構築した。会期中、事務局が定期的に来場者アンケートを回収し、その都度改善していくことを心がけていた。一方で、第1回実行委員会の開催から、イベントのプレオープンまでの期間が約3ヶ月間と短く、準備期間が十分に確保できなかったため、より濃密な住民との連絡調整や合意形成、周知などが今後の重要な課題と考えられる。開催に至るまでの会議等のスケジュールは表2の通りである。実行委員会は開催報告も含め計5回行われ、そのうち2回は報道向け質疑応答が実施された。

表2 なおえつうみまちアート 2021 会議等スケジュール

日付		内容
4月30日	第1回 実行委員会	実行委員会の設置、事業名称の協議、予算の審議など ※ 報道向け質疑応答あり
5月14日	第2回 実行委員会	ロゴ製作の協議、スケジュール協議など
6月18日	第3回 実行委員会	作品プランの説明、グラフィックデザイン協議、市民参画 の取組内容の検討
7月12日	市民説明会	事業概要、作品紹介、イベント周知・ボランティア募集な ど 参加者：15人
7月15日	第4回 実行委員会	作品制作・広報活動進捗報告、ボランティア募集、予算執 行状況報告など ※報道向け質疑応答あり
7月31日	オープニングセレモニー	
8月1日～ 9月26日	開催期間中	
9月26日	クロージングセレモニー	
10月22日	第5回 実行委員会	事業・アンケート結果報告、決算見込み、意見交換

出典：なおえつうみまちアート 記録集より

事業終了後の効果の検証は、目的の1つである地域の価値を見つめ直す機会の創出という観点では、アンケートから地域資源と魅力を伝える機会になったという意見が出されるとともに、行ったことのない施設への来訪や、直江津の知識の共有など新しい機会が作られていたという意見がみられることから、一定の効果が得られたことが分かる。一方で、多額

の事業費に対する費用対効果を疑問視する意見も見受けられた<sup>20</sup>。

### 3-3-2 運営体制

協定を結んだ上越市・頸城自動車・良品計画の3者が中心に、上越市内の芸術や観光関連の個人や団体によって実行委員会を構成している。詳細は表3の通りで、上越市美術協会や小林古径記念美術館館長など、芸術の専門家や、直江津商店街連合会会長などの商業者、直江津地区町内会長連絡協議会会長などの地域の各種団体、上越教育大学の教員などが委員として任命され、運営や事務局を担った。さらに上越市長や頸城自動車株式会社代表取締役社長、株式会社良品計画代表取締役会長を顧問に迎え、産学官民の多様な人材17名で構成されている。

表3 なおえつうみまちアート 実行委員会 構成員名簿

(敬称略、役職は実行委員会設立時)

区分	氏名	所属団体名・役職
会長	山田 知治	上越観光コンペティション協会 会長
副会長	濱口 剛	上越美術協会 会長
	新井 康祐	直江津商店連合会 会長
委員	五十嵐 史帆	上越教育大学 教授
	石川 清春	上越美術教育連盟 会長
	笠原 元気	直江津地区連合青年会 会長
	川上 宏	上越商工会議所 専務理事
	久保田 幸正	直江津地区町内会長連絡協議会 会長
	三木 公一	上越地域振興局 局長
	彦坂 薫	直江津まちづくり活性化協議会 副会長
顧問	村山 秀幸	上越市長
	山田 知治	頸城自動車株式会社 代表取締役社長
	金子 政明	株式会社 良品計画 代表取締役会長
事務局	池田 浩	上越市 企画政策部長
	宮崎 俊英	上越市 小林古径記念美術館長
	小山 祐子	頸城自動車株式会社 経営管理部長
	河村 玲	株式会社 良品計画 ソーシャルグッド事業部スペースグッド担当部長

出典：なおえつうみまちアート 記録集より

<sup>20</sup> 新潟日報デジタルプラス (<https://www.niigata-nippo.co.jp/articles/-/16802>) 参照

事務局体制は図 4 の通りで、上越市と頸城自動車、良品計画の 3 者で構成されている。それぞれの組織の特徴を活かし、各所との連携を行いながら協働で運営を行っていた。特に公共バスを経営する頸城自動車が事務局に入ることによって、直江津駅発の 4 会場を結ぶ循環バスの設置が実現し、来場者の移動手段の選択肢増加に繋がった。

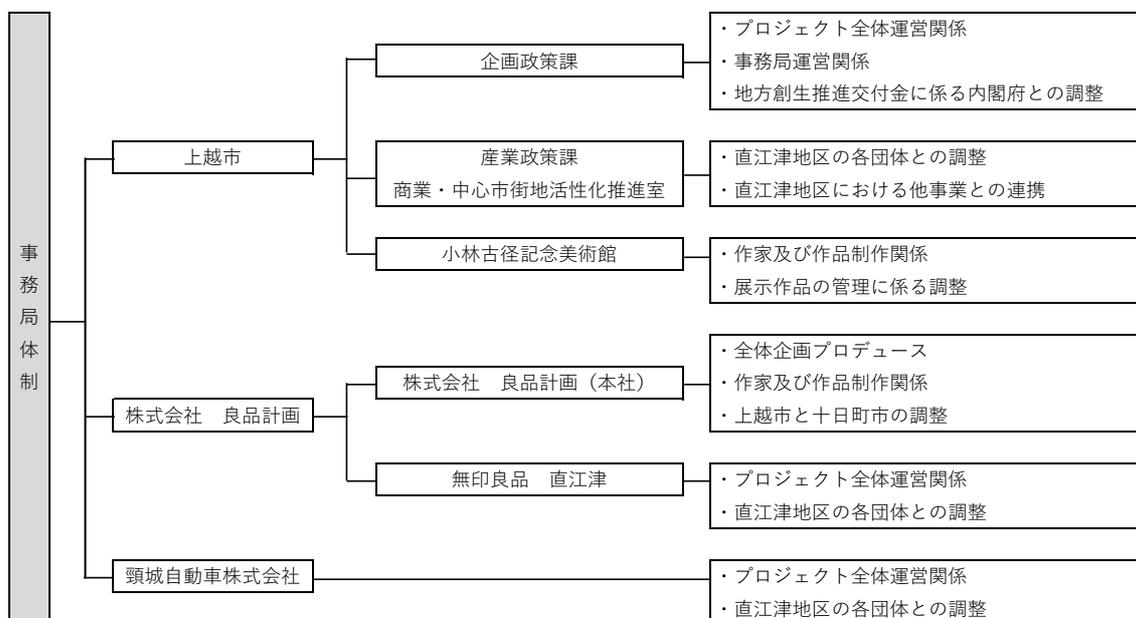


図 4 なおえつうみまちアート組織図

出典：なおえつうみまちアート 記録集より

また、キュレーターは鈴木潤子氏 (@J ディレクター) が務め、直江津の地域資源を活かせる 8 組の作家の選出などを行った。鈴木潤子氏は、時事通信社、森美術館、日本科学未来館で通算約 20 年間の勤務を経て独立、2011 (平成 23) 年より無印良品有楽町店内のギャラリースペース・ATELIER MUJI にてキュレーターとして 8 年間で約 50 件の展覧会とその関連イベントを企画運営した。その後、2019 (平成 31) 年 4 月に開店した無印良品銀座店 6 階 ATELIER MUJI GINZA にて展覧会やイベントのキュレーションを行っており、無印良品と関わりの深い人物である。そして同時並行で、フリーランスとしてこれまでの経験を活かした個人事務所@J を立ち上げ、アートやデザインを中心に、幅広い分野で PR やキュレーション、文化施設の立ち上げに携わっている<sup>21</sup>。

その他、運営スタッフとして、作品制作や運営サポートのボランティアの募集を行い、計 578 人が参加した。ボランティアの項目には、各作品の制作・撤収サポートの業務のほかに、インフォメーションセンターでの案内業務や船見公園周辺海岸会場の清掃活動などがあった。会期中の木曜夕方及び土曜早朝に行われた海岸清掃では、計 523 人が参加し、8 月 3 日

<sup>21</sup> Schoo 先生一覧 (<https://schoo.jp/teacher/2775>) 参照

には上越市内の関根学園高等学校の学生 23 人による清掃活動も行われた。

### 3-3-3 企画内容

アーティストは全員新潟県外出身者であり、アートプロジェクトの開催にあたり、作家自身が実際に現地調査を行い、地域資源との関係を確認した上で作品展示に取り組んだ（表 4）。

表 4 アーティスト一覧

作家	作品	展示会場
空間演出研究所	そらとみなと	船見公園周辺海岸会場
GELCHOP	直江津アップサイクルセンター	安国寺通り特設会場
西村優子	100 年後・旧直江津銀行の姿	ライオン像のある館（旧直江津銀行）
渡辺英司	名称の海園／めいしょうのみその	直江津屋台会館
	小さな屋台／移動案内車	まちなか各所
青田真也	A.B in Naoetsu	安国寺通り特設会場
L PACK.	Atelier Shop Naoetsu	安国寺通り特設会場（7/31～8/9）
NAKAYOSI（L PACK. × 青田真也）	アーティストマーケット NAKAYOSI	安国寺通り特設会場（8/1）
松岡亮	動く。動き出す。遊び。	安国寺通り特設会場

出典：なおえつうみまちアート 記録集より

渡辺英司の作品「小さな屋台／移動案内車」は互の市広場や三八朝市通りなど、10 箇所  
で活用され、会期後には国府小学校・直江津小学校・直江津南小学校・古城小学校に作家から  
寄付された（写真 3）。

写真 3 「小さな屋台／移動案内車」 エルマール 1F



出典：著者撮影

プロジェクトでは、作品展示のほか、作家によるワークショップや、キュレーターや市立小林古径記念美術館館長によるトークイベントなども行われた。加えて、直江津まちづくり活性化協議会と直江津商店連合会<sup>22</sup>による地域の取り組みには、実行委員会からそれぞれ100万円を超える助成が行われた。「アートと直江津（まち）を楽しむスタンプラリー」と題した直江津商店連合会の取り組みは、会期中の9月の土日祝日計10日間開催され、スタンプラリー達成者（1日先着200名）には直江津の50店舗で使用できる500円引き券を配布した。

<sup>22</sup> 直江津地区の8つの商店街（駅前、中央、港町、東部、西部、五智、駅南、四ツ屋・旭）が加盟する任意の商店街団体

(<https://naoetsu-shoren.com/about/>) 参照

### 3-3-4 事業予算

うみまち 2021 の決算額は表 5 の通りである。収入は、上越市からの交付金が約 5,800 万円と最も多く、加えて市内企業や団体、個人からの協賛金、また、インフォメーションセンターでの協賛金や募金などで担われた。また、市外に本社がある企業については、企業版ふるさと納税での協力を依頼した。最終的に 51 の企業・個人からの協賛及び 7 社からの企業版ふるさと納税による協賛があり、収入は、合計で約 6,300 万円となった。

支出については作品制作費が最も多く、約 2,300 万円となった。その次に管理運営費、広報費と続き、それぞれ 1,000 万円を超える支出となった。

表 5 なおえつうみまちアート 決算

	決算額	摘要
収入		
交付金	58,485,727	上越市交付金
協賛金	4,130,250	市内企業、個人
補助金	1,000,000	新潟県職員互助公益事業助成金
その他	965	インフォメーションセンター使用料、利息
収入計	63,616,942	
支出		
事業費		
作品制作費	23,683,630	作家委託料 等
会場整備費	8,904,986	会場整備、賃借料 等
イベント費	2,938,373	ワークショップ、スタンプラリー助成金 等
管理運営費	12,685,099	スタッフ業務委託料 等
広報費	10,285,389	チラシ、ポスター作成 等
事務局費		
企画運営費	3,300,000	作家渉外・事業調整業務委託
事務局運営費	1,104,628	活動車両レンタル・事務局スタッフ旅費 等
雑費	714,837	郵便料 等
支出計	63,616,942	

出典：なおえつうみまちアート 記録集より

### 3-4 みんなでつなごう なおえつうみまちアート 2022 (うみまち 2022)

#### 3-4-1 概要

みんなでつなごう なおえつうみまちアート2022(うみまち2022)は、2022(令和4)年8月20日(土)から9月25日(日)の土日祝日の14日間開催され、メイン会場の屋台会館で行われていた主催イベントのうみまち作品展には約3,000人が来場した。

行政の財政支援が無くなったが、うみまち2021で芽生えたものをつなげていきたいという思いから、地元の有志が中心となり、市民主体によるアートプロジェクトの開催が決定した。開催を計画する中で、2022(令和4)年2月21日に有志以外の地域住民を交えてなおえつうみまちアートについて考える場として、うみまちミーティング1stが実施され、うみまち2021の実施報告を行うとともに、今後の取り組みについての意見交換が行われた。その場では、継続開催する重要性やアートプロジェクト開催の意義が確認された。その後、うみまち2022の開催までに2回のうみまちミーティングと5回の実行委員会を実施し、8月の開催に向けての意見交換が進められた。うみまちミーティング及び実行委員会のスケジュールと具体的な内容は表6の通りである。

表6 なおえつうみまちアート 2022 会議等スケジュール

日付		内容
2月21日	うみまちミーティング 1st	市職員による 2021 年度の実施報告、意見交換会
4月19日	うみまちミーティング 2nd	目的・開催時期・内容等開催に向けた話し合い
5月25日	第1回実行委員会	実行委員自己紹介、開催期間の確定、各部会の設定
6月15日	第2回実行委員会	イベント内容の整理、部会での協議
6月29日	第3回実行委員会	イベント概要の共有、チラシ・HP 作成に必要な情報整理
7月12日	うみまちミーティング 3rd	概要報告、意見交換
7月14日	第4回実行委員会	プレスリリースの内容確認、部会の進捗共有
7月20日	プレスリリース	
8月16日	第5回実行委員会	イベント最終確認、準備日程・役割分担の確認
8月20日～ 9月25日	開催期間中	
9月1日	第6回実行委員会	開催2週までの反省、後半に向けた確認
10月21日	第7回実行委員会	今年度の振り返り
12月8日	うみまちミーティング 4th	2022 年度実施報告、振り返り

出典 なおえつうみまちアート 2022 実行委員会へのヒアリング調査にもとづき著者作成

第2回目のアートプロジェクトであるうみまち2022では、前年度のうみまち2021の「直江津の歴史や文化、風土などまちの魅力を引き出すとともに、まちの賑わいを創出する」という趣旨を引き継ぎながら、イベント名に「みんなであつなごう」という言葉を追加し、「みんなであつなごう なおえつうみまちアート2022」として、直江津の良いところを知り、つないでいく地域のイベントになることを目的として開催された。また、コンセプトを「アートでなおえつを元気に」とし、市民による様々な「アート」で直江津を盛り上げ、地域活性化の一端を担うようなイベントを目指している。

会期中に行われるイベントは、実行委員会の運営する主催イベントと、連携イベントの2つに分けて開催した。会場は、うみまち 2021 で使用された屋台会館を中心に、その他、直江津ショッピングセンターエルマールや直江津の商店街などで行われた（写真4）。

#### 写真 4 会期中 屋台会館 外観



出典：著者撮影

会場は、実行委員会が管理可能な直江津地区内の施設が選定され、メイン会場の1つである屋台会館では、土日祝日の開催日全てに入場者数のカウントが行われた。さらに連携イベントの会場として、うみまち 2021 にも使用されたライオン像のある館（旧直江津銀行）、屋台会館近くにある上越市立水族博物館、直江津駅や関川の反対岸に位置する直江津港佐渡汽船ターミナルなどが使用され、うみまち 2022 ではさらに関川河口の左岸のみならず、右岸側でもイベントを行った。直江津駅から一番遠い地点である直江津港佐渡汽船ターミナルは、駅から約 2km 地点に位置し、うみまち 2021 に比べ会場が少し広い範囲での開催となったことが分かる（図5）。



図5 なおえつうみまちアート2022 ガイドマップ

出典：みんなでつなごう なおえつうみまちアート2022 ホームページより

住民の合意形成は、地域コミュニティの中心的人物が関わる運営であったことから円滑に進められた。運営主体が地域住民にとって顔見知りであることは、地域住民のうみまち2022への参加に寄与するとともに、実行委員会にとっても、普段から知っている気心の知れた人物だからこそ、必要な配慮を行いながら活動できるという利点があった。また、名前を引き継いだ上での2回目の開催は、アートプロジェクトの実施内容を大まかに想像しやすく、合意形成に貢献した。さらに町内会を含めた一般市民向けの会議として、うみまちミーティングを実施し、その際に、実行委員会から地域住民に向け、地域が一体となつてうみまち2022を開催していきたいという意思表示が行われ、地域住民への理解につながった。7月20日には報道機関にプレスリリースを行ったほか、町内会長にも個別に説明を実施し、イベント内容の理解を深めると同時に、主催イベントの「うみまち水族館」における、まちなかの作品掲示に協力依頼を行い、賛同を取り付けた。さらに回覧板等で市民全体に告知を行った。

また、上越市が地域活動を財政的に支援する地域活動支援事業にも採決された。地域活動支援事業は、身近な地域自治を推進し、地域における課題解決やそれぞれの地域の活力を向上するため、市民が自発的・主体的に行う地域活動に対して支援する制度であり、上越市内

全域を対象に行われている<sup>23</sup>。この制度では、各地域自治区の住民の代表が審査員を担っており、採択には、各地域自治区の審査基準を達成している必要がある。したがって、採択は、地域住民のアートプロジェクト開催に対する納得感を向上させ、間接的に地域住民の合意形成につながったと考えられる。

開催による効果は現在検証中であるが、うみまち 2022 の目標であった「地域の人・関係者・来訪者がイベントを楽しみ、直江津のいいところを知る」という観点では、メインの対象者を外部の人から地域住民に変更し、住民参加型のアートプロジェクトとなったことから、概ね目標は達成されていると考えられる。

### 3-4-2 運営体制

実行委員会には、直江津にゆかりのある方が大半を占めた。実行委員長は、直江津商店街に店を構える三野屋の重原稔氏が新たに選出され、事務局には市議会議員である安田佳代氏と木南和也氏が就任した。実行委員のメンバーには、うみまち 2021 の関連企業である良品計画や頸城自動車などの職員や上越市の職員もいるが、あくまで一市民として運営に携わっていた（表 7）。

表 7 なおえつうみまちアート 2022 実行委員会

区分	団体名・役職
実行委員長	三野屋（直江津商店街内、和菓子店）
事務局	市議会議員 2名
実行委員メンバー	上越タイムス、佐渡汽船、直江津地区連合青年会、うみがたり、上越教育大学学生、商工会議所、良品計画、頸城自動車 他

出典：みんなであつなごう なおえつ うみまちアート 2022 概要より

また、うみまち2022では、行政の財政支援が無くなったことから、収入が協賛金に限定されることになり、アートプロジェクトのディレクションを行える人材の配置は行わなかった。また外部の専門的なアーティストの出展も見合わせて、できる範囲の取り組みを行うことになった。そのため、実行委員のメンバーが業務分担し、関連イベント認定の判断は実行委員長が行なったり、主催イベント等の企画立案には、上越市内の芸術に詳しい人が携わったりするなど、自前でうみまち2022の運営を行っていた。

<sup>23</sup> 上越市の地域自治区制度

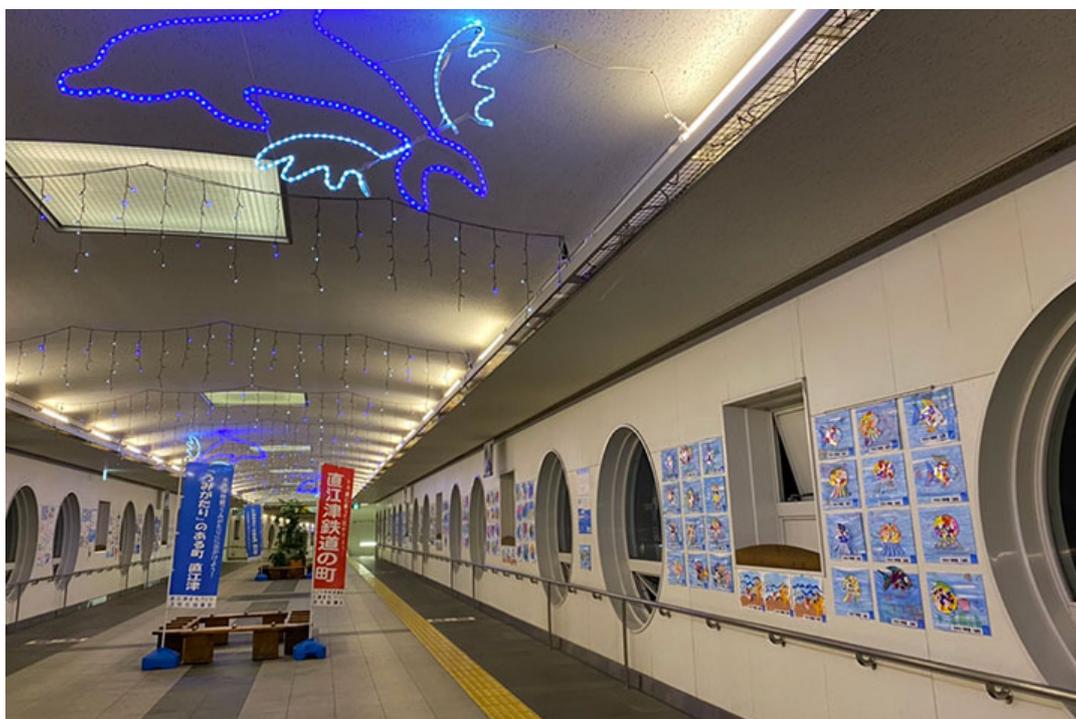
<https://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/186357.pdf>  
(2022 (令和 4) 年 12 月 7 日 参照)

ボランティアスタッフは、予算や運営体制の状況により募集しなかった。運営業務には、インフォメーションでの案内・スタンプラリー補助・ワークショップ補助・会場案内などがあり、実行委員会のメンバーが多岐にわたる役割を担っていた。またうみまち2022は、全体を統括するキュレーターを設置をしなかったことに伴い、連携イベントなどアートプロジェクトに関する最終決定は実行委員長が行い、市民を中心とした多くの人が楽しめる参加型イベントを目指した。

### 3-4-3 企画内容

主催イベントは、展示やワークショップを開催した。展示は「うみまち水族館」と「うみまち作品展」の2つであり、うみまち水族館では周辺小学校や幼稚園・保育園の児童・園児の作品計748点が商店街や直江津駅などに展示され、多くの家族連れが来場した。また、周辺小学校や幼稚園・保育園への協力依頼は、うみまち2022の事務局員と各園・小学校との密接な関係性により短期間で実現し、市民主体イベントならではの特徴であった（写真5）。

写真5 うみまち水族館 直江津駅構内の様子



出典：みんなであつなごう なおえつうみまちアート2022 ホームページ

またうみまち作品展では、「直江津のまちやうみを感じられる作品」をテーマに7月20日より作品を募り、応募のあった12組の作品展示を行った（表8）。

表 8 うみまち作品展 出展者一覧

作家	作品形態
《一般展示》	
ひみつきちひろみちゃん	絵画・立体作品
椅子野郎	絵画
シロコダケンイチ	写真
アトリエ ドレメ 3号	立体作品
Coyote with 直江津学びの交流館	絵画・平面作品
ERI with うみまち JOB	絵画・平面作品
横手正実	絵画・平面作品・立体作品
上越総合技術高校	絵画・平面作品
たかしょう	立体作品
佐藤和夫	写真
直江津中学校美術部	平面作品・立体作品
ibohashi	水彩画
《特別展示》	
直江津祇園祭屋台	屋台展示
大型夕日パネル	大型パネル展示

出典：みんなであつなごう なおえつうみまちアート 2022 ホームページより

出展されたものは、地元作家の他に上越市内の中学校・高校の生徒の作品であった。特別展示は、直江津祇園祭にて使用される屋台や、直江津船見公園から撮影された夕日を印刷した巨大パネルの展示であり、訪れた人が直江津の歴史や資源について知ってもらうきっかけとなっていた（写真6）。

## 写真 6 特別展示の様子



出典：みんなでつなごう なおえつうみまちアート 2022 ホームページ

ワークショップ「おさかなをつくろう」では、土日開催計14日間で約450名の参加があった。ワークショップは、当初エルマールと屋台会館を会場に8月20日と21日の2日間計4回の限定開催が予定されていたが、好評のため直江津屋台会館に会場を変更し、期間中の常時開催となった。

一方、連携イベントは表9のとおりである。会期中、直江津で行われるイベントで、連携イベントに登録申請があったものを「うみまちアート」の名前で統一して情報発信することで、直江津全域の賑わい創出に繋がった。連携イベントの具体的内容は、絵画などの美術作品に限定せず、音楽やダンスなど、アートを広域に捉えることで、楽器演奏やダンスパフォーマンスなど、より多くのイベントを含むことになった。その結果、直江津ショッピングセンターエルマールのイベント会場で開催された演奏やパフォーマンスには、合わせて約1,200名の参加があり、賑わい創出の一助となった。また、直江津駅やエルマール等、計6会場を巡るまちなか回遊スタンプラリーが、9月3～25日に実施され、県外来場者も含め682名の参加があった。このスタンプラリーには、直江津地区内の29の店舗や企業から、景品提供という形で協力があつた。

表9 なおえつうみまちアート2022 連携イベント一覧

開催期間	会場	名称	内容	主催・作家・アーティスト	開催期間	会場
7月26～30日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)	ひみつきち・ひろみちゃん3人展	展示・ワークショップ	Masatoshi Yoshizaki・工藤美寿樹・インダダケンイチロー	7月26～30日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)
8月20日	エルマール2F OpenMUJI	海とまち～私たちはこの大地と自然が大好きです	展示	TimberingBase	8月20日	エルマール2F OpenMUJI
8月20日	エルマール1F イベント広場	あんさんぶる・ぱっとコンサート!	演奏	あんさんぶる・ぱっと	8月20日	エルマール1F イベント広場
8月20日	エルマール1F イベント広場	上越高校ダンス部パフォーマンス	パフォーマンス	上越高校ダンス部	8月20日	エルマール1F イベント広場
8月21日	エルマール2F OpenMUJI	流木と残布でモビールをつくろう	ワークショップ	無印良品 直江津	8月21日	エルマール2F OpenMUJI
6(中止)	直江津漁港駅前	うみまち親子ふれあひイベントin直江津の海				
8月25日～8月28日	上越市立水産博物館うみがたり	ART OF REBORN 2022	展示	保坂俊彦・加治聖哉	6月25日～8月28日	上越市立水産博物館うみがたり
7月20日～8月28日	エルマール1F イベント広場	ART OF REBORN 2022 in エルマール	展示	加治聖哉	7月20日～8月28日	エルマール1F イベント広場
9月3日	エルマール1F イベント広場	うみまち生ライブ(長谷川紗耶ソロミニコンサート)	演奏	うみまち生ライブ企画委員会・長谷川紗耶	9月3日	エルマール1F イベント広場
9月4日	エルマール1F イベント広場	どりいむ♥演奏会	演奏	どりいむ♥	9月4日	エルマール1F イベント広場
9月4日	エルマール1F イベント広場	高田北城高校吹奏楽部	演奏	高田北城高校吹奏楽部	9月4日	エルマール1F イベント広場
9月4日	エルマール1F イベント広場	からふるピーンズ☆うみまちパフォーマンス2022	パフォーマンス	からふるピーンズ	9月4日	エルマール1F イベント広場
8月23日～9月10日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)	てくてくつなげ!来春ZOO3	展示	上越教育大学陶芸研究室・彫刻研究室	8月23日～9月10日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)
9月10・11日	直江津屋台会館	うみまちマルシェ	販売・ワークショップ		9月10・11日	直江津屋台会館
9月11日	エルマール1F イベント広場	Park's 水管5周年コンサート!	演奏	Park's	9月11日	エルマール1F イベント広場
9月10・11日	無印良品 OpenMUJI	うみまちサンセットパネル展	展示	うみまちサンセットパネル展実行委員会	9月10・11日	無印良品 OpenMUJI
9月3・16日	うみねこテラス Dreamland	Sunset Live	パフォーマンス・飲食	Lady Keikei	9月3・16日	うみねこテラス Dreamland
9月17日	直江津ショッピングセンター・エルマール	パスの日フェスタ2022	展示等	直江津ショッピングセンター・エルマール	9月17日	直江津ショッピングセンター・エルマール
9月17日	エルマール1F イベント広場	うみまちピアノ(ストリートピアノ)	演奏	直江津ショッピングセンター	9月17日	エルマール1F イベント広場
9月18日	直江津ショッピングセンター・エルマール	うみまちパフォーマンスコンテスト	パフォーマンス	うみまちパフォーマンスコンテスト実行委員会	9月18日	直江津ショッピングセンター・エルマール
9月18日	エルマール1F イベント広場	うみまち生ライブ(上越大ストリートダンス)	パフォーマンス	上越教育大学ストリートダンス部	9月18日	エルマール1F イベント広場
23(中止)	直江津屋台会館	フワフワ茶道体験	体験	上越教育大学茶道部	9月18日	直江津屋台会館
24	手づくり相崎・上越作品展	手づくり相崎・上越作品展	展示	手づくり相崎・上越作品展実行委員会	9月16～18日	清福寺
9月19日	エルマール1F イベント広場	うみまち生ライブ(ユウナス・コンサート)	パフォーマンス	上越教育大学合唱団	9月19日	エルマール1F イベント広場
8月29日～19日	エルマール1F イベント広場	うみまちタコス【期間限定】	飲食	シャインイン	8月29日～19日	エルマール1F イベント広場
9月3・19日	五智園分寺境内 上人茶屋	うみまち生ライブ(小林愛佳フルートミニコンサート)	演奏	うみまち生ライブ企画委員会・小林愛佳	9月3・19日	五智園分寺境内 上人茶屋
9月3・19日	エルマール1F イベント広場	うみまち生ライブ(竹川純ピアノミニコンサート)	演奏	うみまち生ライブ企画委員会・竹川純	9月3・19日	エルマール1F イベント広場
9月19日	直江津屋台会館	うみまち時間	販売・ワークショップ	うみまち時間	9月19日	直江津屋台会館
9月19日	エルマール1F イベント広場	ソアラノ明と篠笛とピアノコンサート	演奏	篠笛企画ノブ	9月19日	エルマール1F イベント広場
9月19日	エルマール1F イベント広場	うみまちマーチング	演奏	上越ブレイブパッコングホース	9月19日	エルマール1F イベント広場
9月17～19日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)	うみまちサンセットパネル展	展示	うみまちサンセットパネル展実行委員会	9月17～19日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)
9月23日	三・八の市	朝市 倉とアートまつり	販売・ワークショップ	上越市・直江津菓子組合	9月23日	三・八の市
9月24日	うみねこテラス	うみねこマルシェ	体験	シナリアーリエ	9月24日	うみねこテラス
9月23・24日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)	響り通ライブ	演奏	上越SONGS倶楽部	9月23・24日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)
9月16～25日	直江津屋台会館	中間音楽フェスティバルコンサート	演奏	カーナリ協会マリーキータ	9月16～25日	直江津屋台会館
9月16～25日	エルマール2F 無印良品内	キラキラ水族館	展示	直江津南小学校6年生	9月16～25日	エルマール2F 無印良品内
8月19日～9月25日	直江津学びの交流館 直江津図書館2Fこどもとじょしつ	お祭のぬりえ	展示	直江津図書館	8月19日～9月25日	直江津学びの交流館 直江津図書館2Fこどもとじょしつ
8月18日～9月25日	五智園分寺境内 上人茶屋	親子野郎現る!ひみつきち4人展!	展示	上人茶屋・ひみつきちひろみちゃん	8月18日～9月25日	五智園分寺境内 上人茶屋
8月10日～9月25日	五智園分寺境内 上人茶屋	なおえつうみまちアート2022連携メニュー～	飲食	上人茶屋	8月10日～9月25日	五智園分寺境内 上人茶屋
8月20日～9月25日	三野屋菓子店	高強組うみまち作品展	展示	高強組	8月20日～9月25日	三野屋菓子店
8月20日～9月25日	佐渡汽船ターミナル	なおえつうみまち作品展	展示	佐渡汽船ターミナル	8月20日～9月25日	佐渡汽船ターミナル
9月24・25日	無印良品 直江津 OpenMUJI	うみの生き物「ヨリ」ミチ図工室!	展示	上越教育大学	9月24・25日	無印良品 直江津 OpenMUJI
9月25日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)	うみまちサンセットパネル展	展示	うみまちサンセットパネル展実行委員会	9月25日	ライオン像のある館(旧直江津銀行)
9月16日～10月2日	直江津・高田各商店街及びえちごトキめき鉄道直江津駅・高田駅	ぶらり商店街めぐりスタンプラリー	スタンプラリー	上越市本町三丁目商店街振興組合・上越市本町四丁目商店街振興組合・上越市本町五丁目商店街振興組合・高田駅前通り雁木の会・直江津駅前商店街振興組合・直江津西部商店街振興会・えちごトキめき鉄道株式会社	9月16日～10月2日	直江津・高田各商店街及びえちごトキめき鉄道直江津駅・高田駅

出典：みんなでつなごう なおえつうみまちアート2022 ホームページより

### 3-4-4 事業予算

事業予算は以下の通りである（表 10）。うみまち 2021 の主な収入であった上越市の予算は、開催に対する一部市民の批判的な意見や、うみまち 2022 の地域住民主体による開催が決定したこと等の理由から、前年度のような交付がなされなかった。そこで収入として、直江津地区の地域活動支援事業が活用され、60 万円が計上された<sup>24</sup>。加えて 15 の企業からの協賛金として 38 万円が集まったほか、イベント内で行われたスタンプラリーでは、29 の店舗や企業から景品提供という形で協賛をいただいた。景品提供は全て直江津地域内の店舗や企業からであり、景品交換や提供を後日各店舗で行うことにより、イベント開催期間後の直江津地区の賑わい創出にも寄与した。

表 10 みんなでつなごう なおえつうみまちアート 2022 決算見込み

	決算見込み	摘要
収入		
交付金	600,000	地域活動支援事業
協賛金	380,000	市内企業、個人
収入計	980,000	
支出		
内訳非公開	980,000	会場費、広報物、ワークショップ材料費 等
支出計	980,000	

出典 うみまちミーティング 4th の決算報告にもとづき著者作成

支出の詳細は、2022（令和 4）年 12 月現在では非公開であるため、大まかな摘要のみ掲載するが、作品展示や各会議で使用した会場費、また、ポスターやパンフレットといった広報物への支出であった。

### 3-5 小括

3 章では、うみまち 2021 と うみまち 2022 の概要についてそれぞれまとめてきた。その中で、うみまち 2021 と うみまち 2022 の間にはアートプロジェクトの規模や内容、運営方法など、多くの変更点があることが明らかとなった。一方で、うみまち 2021 から うみまち 2022 にかけて、名称やテーマなど引き継がれたものもあった。なぜ引き継がれたものと引

<sup>24</sup> 上越市ホームページ 地域活動支援事業 令和 4 年度採択事業一覧  
<https://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/221575.pdf>  
(2022（令和 4）年 12 月 5 日 参照)

き継がれなかったものがあったのか、そしてなぜうみまち 2021 とうみまち 2022 が継続開催に至ったのか、4章ではそれぞれ比較を行いながら論じていく。

## 第4章 うみまち 2021 と うみまち 2022 の比較

本章では、2021（令和3）年に行われた、なおえつうみまちアート（うみまち 2021）と2022（令和4）年に行われた、みんなでつなごう なおえつうみまちアート 2022（うみまち 2022）をヒト（人材）、カネ（資金）、モノ（企画）<sup>25</sup>、コト（運営）の4点から比較を行い、持続するアートプロジェクトの条件についてまとめていく。

### 4-1 ヒト（人材）の比較

うみまち 2021 と うみまち 2022 を比較して、アートプロジェクトに関わる人の違いが挙げられる。うみまち 2021 で運営の主体となっていたのは、上越市や頸城自動車、良品計画であり、アーティストの選出を含め、アートプロジェクト自体のキュレーションは、良品計画と関わりが深い鈴木潤子氏が担った。このように、県外者をキュレーターやアーティストとして巻き込み、地域資源を活用した現代アートのプロジェクトは、これまで直江津にはなかった新たな事業であった。さらに外部の専門家から見た直江津の評価が加わることにより、うみまちというキーワードの表出や夕日等の地域資源の再認識へと繋がった。また、上越市や頸城自動車、良品計画が主体となったことで、6,000万円規模の大きいアートプロジェクトが開催可能となった。

一方で、うみまち 2022 における運営主体は、地元商店の店主である重原氏など、直江津にゆかりのある地元の人材で構成された実行委員会であり、イベント運営に関する全ての業務を実行委員会が担っていた。日常的に地域コミュニティの中心的役割を担っている直江津在住者が、実行委員の中心メンバーであることは、なおえつうみまちアートへ地域住民が関わりやすい雰囲気構築に大きく貢献していた。また、直江津祇園祭の屋台展示や、地元学生の協力など、地元住民主体の運営ならではの取り組みが多くあった。

ここで、直江津のコミュニティの特徴について確認しておく。直江津では、毎年7月26～29日に直江津祇園祭が開催されており、この祭りは高田地区の高田祇園祭と合わせて上越まつりと呼ばれ、上越地域で最大の祭りとなっている<sup>26</sup>。直江津祇園祭では、直江津地区の町内ごとに屋台を出している。また、直江津には1911（明治44）年より三・八市という朝市があり、毎月3と8が付く日に直江津地区内の三・八通りにて開催されている<sup>27</sup>。これらから直江津のコミュニティの特徴は、祭りなど伝統文化による深い歴史を持ち、日常的な地域内での関わりから、そのつながりが強固であることが挙げられる。強固なコミュニティ

---

<sup>25</sup> モノ（企画）は展示やワークショップを含む

<sup>26</sup> 直江津祇園祭ホームページ スケジュール 参照  
(<https://www.naoetsu-crs.com/gionsai/schedule/>)

<sup>27</sup> 直江津地区連合青年会 直江津のスポット 参照  
(<https://www.naoetsu-crs.com/gionsai/schedule/>)

は、祭りなどの大きな任務を達成する際に必要となる団結力を有し、主体性の尊重や合意形成の徹底が遵守される。このような強固なコミュニティは、アートプロジェクトの開催にとってよい影響をもたらすと考えられる。

次にうみまち 2021 とうみまち 2022 での地域住民の意識を比較する。うみまち 2021 の反省点として、直江津の住民が、手伝いのような役割となることが多く、開催地の住民として主役になっていないのではないかという意見がうみまち 2021 の第 5 回実行委員会等で挙げられた<sup>28</sup>。この点は、うみまち 2022 の実行委員会が、直江津にゆかりのある人々で再構成されたことで、地域住民主体のアートプロジェクトに改善できたと言える。

また、うみまち 2021 では、開催の約 3 ヶ月前に実行委員会が動き出したことなどから、地域住民には唐突だと感じられ、さらに周知期間も短く、地域住民の実施に対する納得感が不足していることも反省点として挙げられていた。それに対し、うみまち 2022 は、2 年目の開催であることや、合意形成にも時間をかけるとともに、開催に向けて地域に適した配慮を行なったことにより、実施に対する納得感が高まったと考えられる。そして、うみまち 2022 実行委員長の重原氏は、「直江津に対する（重原氏の）意識に変化はなく、直江津を元気にしたいという気持ちは、うみまち 2021 の開催に関係なく、地域住民が元来持っていた意識である」と主張する。一方で、実行委員のメンバーの中には、うみまち 2021 開催時の直江津地区内の賑わいに感動し、地域活性化の手段の 1 つとしてアートプロジェクトを認識するきっかけとなった人もいた。アートプロジェクトの開催が、新しい人の巻き込みや意識の変化に寄与したと考えられる。

次は来場者を比較する。来場者数は、うみまち 2021 が約 22,000 人であり、うみまち 2022 は屋台会館が約 3,000 人、エルマール会場での連携イベントに約 1,200 人、主催ワークショップに約 450 人であった。一方で、うみまち 2022 ではすべての会場での来場者数のカウントを行なっておらず、来場者総数の把握は出来ていないため、単純な比較はできない。そこで受付やアンケートまたスタンプラリー等で、明確に人数が分かる部分から、来場者の居住地について比較を行う。来場者の居住地は、表 11 及びグラフ 1 の通りである。比較にあたり、うみまち 2021 は、なおえつうみまちアート記録集の地域別来場者数割合（参考）・来場者アンケート集計結果（3）住まいの項目、うみまち 2022 はスタンプラリー応募者の集計を使用する。うみまち 2021 の地域別来場者数割合（参考）は、人数に関する詳細の記載がなかったため、人数記載のある来場者アンケート集計結果との平均値をうみまち 2021 の来場者の居住地データとする。この比較から、うみまち 2021 からうみまち 2022 では、上越市民の来場者の割合が 68% から 92% へと増加していることが分かる。これは、うみまち 2022 が上越市民向けのイベントとして位置づけて開催された結果と言える。

---

<sup>28</sup> 上越タウンジャーナル (<https://www.joetsutj.com/articles/54315101>)

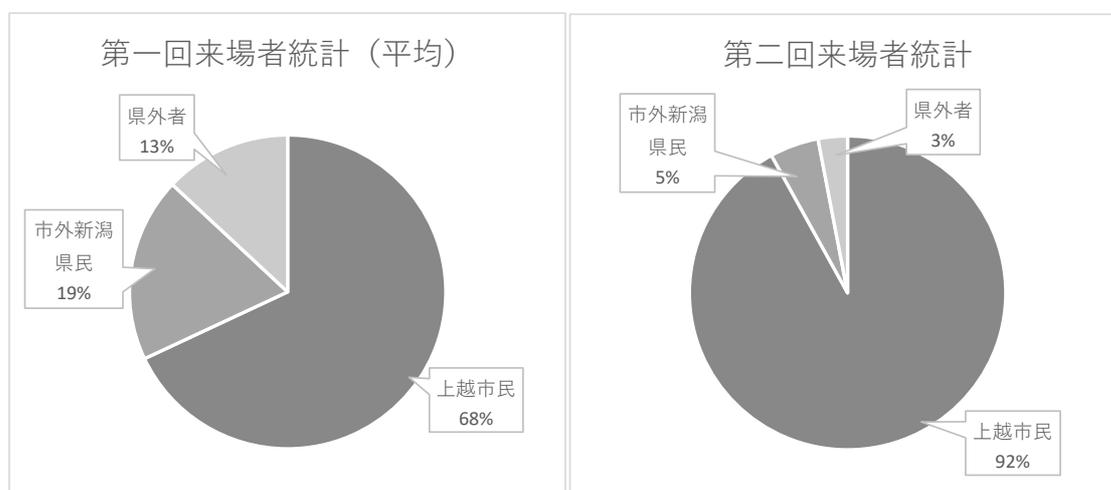
表 11 うみまち 2021、うみまち 2022 来場者居住地統計

	うみまち 2021			うみまち 2022
	データ①	データ②(計 289 人)	平均	データ③(計 682 人)
上越市民	75.7%	60.5%(175 人)	68%	92%(629 人)
市外新潟県民	13.6%	23.5%(68 人)	19%	5%(33 人)
県外者	10.7%	16%(46 人)	13%	3%(20 人)

※ データ①：なおえつうみまちアート 記録集 記載（人数詳細記載なし）

データ②：なおえつうみまちアート 記録集 来場者アンケート

データ③：なおえつうみまちアート 2022 スタンプラリー応募者



グラフ 1 うみまち 2021、うみまち 2022 来場者居住地統計

最後に地域住民の周知と合意形成の比較をする。うみまち 2021 の住民の周知は、最初に直江津地区を中心とした住民への説明や質疑応答を行なった市民説明会の開催がある。また、6 月から 7 月ごろに町内会の回覧板等を活用し、イベント開催の告知を行なった。その他に、実行委員会に直江津地区の商店連合会会長や町内会長などが入ることで、事務局の上越市、良品計画、頸城自動車の 3 者と地域住民間の意見交換が行われやすい工夫がなされた。しかし開催決定から開催までの時間が短く、市民への丁寧な合意形成が実施されたとは言いがたい。一方で、うみまち 2022 では、まず、町内会を含めた一般市民向けの会議として、うみまちミーティングを会期前に 3 回実施している。また、7 月 20 日に報道機関にプレスリリースを行うとともに、町内会長への個別説明や回覧板等で町内全体に対しても告知を行なった。

また、うみまち 2021 の周知の課題として、キュレーターの意向もあり、作品等のプロジェクトの情報公開が規制され、詳細な説明ができなかったことが挙げられる。これまで開

催されたことのないイベントの説明は困難であり、また作家の過去の作品のみで、うみまち2021で展示される作品の雰囲気伝えることにも限界があり、その結果、アートプロジェクトの地域住民の合意形成が進まなかった。一方うみまち2022では、まず地域コミュニティの中心的人物による運営の変更で、地域住民の参加に寄与したほか、説明や交渉の際に普段から知っている相手が行うことで、相手に合わせた対応が可能となった。また、直江津地区における地域活動支援事業の活用が挙げられる。地域活動支援事業は、申請の際に直江津区地域協議会の審査・採択が行われており、この事業に組み入れたことで、地域住民の合意形成に貢献したと考えられる。加えて、うみまち2021の記憶が鮮明な中で、名前を引き継いでうみまち2022の周知を行なったことで、住民にアートプロジェクトのイメージが伝わりやすかったこともうみまち2022の合意形成に寄与していた。

このように合意形成では、うみまち2021に比べ、うみまち2022の方がより住民の合意を得た上での開催であった。その要因として、まず、住民が実行委員会に対し意見を言える場の数の増加が挙げられる。うみまち2021では、市民説明会が1回であったのに対し、うみまち2022では3回のミーティングが行われている。それに加え、うみまち2021では、実行委員会の実施からイベントの開催まで約3ヶ月間であったのに対し、うみまち2022では、2月21日のうみまちミーティング1st実施からイベントの開催まで約6ヶ月あったことで、より丁寧に周知や合意形成が行えたと考えられる。そして、住民主体の運営形態の変化に伴い、アートプロジェクトの内容にも変化があったが、うみまち2022の実行委員会では、直江津の住民がより楽しめるアートプロジェクトを一緒に作っていききたいという明確な意思表示を行っており、その熱量が住民にうみまち2022の一員であるという考えをもたらし、より多くの協力を繋がったと推察する。

これらの比較から、県外者が多く携わったうみまち2021には、地域資源を活用した現代アートという今までの直江津にない表現方法を取り込んだアートプロジェクトが、地域に気づきや再確認をもたらしたことが評価すべき点である。具体的には、来場者だけでなく、地域住民に直江津の地域資源を再認識させるきっかけにもなり、アートプロジェクトが地域活性化の手段の1つとなりうることを実感させたことも良かった点である。一方で、地元住民が中心となり運営を行ったうみまち2022には、うみまち2021の改善を行いながら、地域住民が関わりやすい雰囲気を作り上げ、より多くの地域住民がうみまち2022の意義を共有しながら開催された点が評価すべき点であった。また、合意形成の面では、うみまち2021からうみまち2022にかけて、より丁寧な形に変化しており、直江津独自の強固な地域コミュニティの存在や、地域住民の事業実施に対する納得感からなおえつうみまちアートが地域のものであるという認識を与え、継続開催に影響を及ぼしたのではないかと考える。

## 4-2 カネ（資金）の比較

この節では、資金面からうみまち 2021 とうみまち 2022 の比較を行う。まず、それぞれのプロジェクトに関する収支を比較する。収入は第 3 章で述べたように、うみまち 2021 が上越市の交付金を中心に約 6,300 万円の事業規模、うみまち 2022 が直江津地区の地域活動支援事業を中心に約 100 万円の事業規模であった。

うみまち 2022 の主な支出内容は、作品展示会場や実行委員会・うみまちミーティング会議で使用した会場の会場費、チラシやポスター等の広報物、また、ワークショップ等で使用された材料費などがある。うみまち 2021 とうみまち 2022 に共通している支出項目は、会場（整備）費・広報費・イベント費の 3 つである。うみまち 2021 のこれらの項目の合計は、約 2,100 万円であり、うみまち 2022 の開催では予算がその約 5 % に抑えられている。加えて、うみまち 2022 では、作品制作費や事務局費等を大幅に縮小して開催した。上越市の予算が付かなかったことで、低コストでの開催が余儀なくされた現状もあるが、結果として、うみまち 2021 開催後に出ていた、多額の交付金に対する批判的な意見は解消された。一方で、事務局費の大幅な削減は、活動の持続性という観点から改善すべき点である。

このような予算の減少は、以下の 2 点に大きく影響を及ぼした。1 つ目は運営面である。具体的には、アートプロジェクトに関わるスタッフの雇用状況である。うみまち 2021 では、外部スタッフ等の人件費に充てる予算があったため、実行委員や事務局以外の人員で、各会場の来場者チェックなどの業務を行うことができた。また、スタッフの人数確保によりボランティアの対応が可能となり、詳細な運営マニュアル等を作成した上でボランティアの制度が導入できた。一方、うみまち 2022 では、予算の削減で、スタッフ業務の委託やボランティア環境の整備が行えず、結果として実行委員や事務局への負担が増加した。スタッフの減少は、アートプロジェクト自体の規模感に影響を与え、活動の質の低下につながる。また、ボランティアの活用は、直江津を知ってもらうきっかけの 1 つでもあることから、今後、ボランティア制度の整備に対する費用負担が発生しても、導入を検討すべき優先的な項目と考えられる。

2 つ目に展示内容である。具体的には、外部作品の有無である。外部作家への委託は地域に新しい風を吹き込むチャンスであるが、一方で作品制作費に加え、作家の旅費や作品の運搬費など、多額の予算が必要となるため、委託する作家と地域の親和性やその後の効果など測定する必要がある。うみまち 2022 は、県外作家の作品がなかった代わりに、周辺小学校や幼稚園・保育園の児童・園児たちの作品展示や、多くのワークショップを開催し、アートプロジェクトに来場者が参加しやすい雰囲気づくりの工夫をしていたが、一方で、外部への発信という面では話題性に欠けている場面が見受けられた。外部作家の有無は、アートプロジェクトの雰囲気大きな影響を与えるため、アートプロジェクトの目的や長期的なビジョンを明確にした上で決めるべき重要事項である。うみまち 2021 では、費用対効果に対する批判も大きかった。予算のなかったうみまち 2022 では、外部作家を検討することは困難

であったが、アートプロジェクトの選択肢と可能性を増やすためにも、外部作家を招請する意義や効果を検討しつつ、一定の専門的外部人材を活用する予算は必要と考える。

またプロジェクトと行政との関わりを考える上でも、アートプロジェクト開催における目的や長期的なビジョンの明確化、費用対効果の測定が重要となる。行政が予算を確保し、大規模な予算を投じてアートプロジェクトを開催するためには、地域住民の合意形成が必須となる。また上越市では、うみまち 2021 開催後の 2021（令和 3）年 11 月に市長が交代しており、新市長である中川幹太氏は、なおえつうみまちアートに対し、「課題の整理には一定の期間が必要で、同規模の事業を 2022 年度に実施するのは難しい」<sup>29</sup>と開催に否定的な見解を示していた。市長の交代は、市の方向性の決定に影響を与えるのは当然であるが、方向性が変化した上でもアートプロジェクトに対し、市が補助するべきものであると考えられる明確な目的やビジョン、効果測定、そして合意形成が予算の確保には不可欠である。

#### 4-3 モノ（企画）の比較

この節では、展示内容や企画からうみまち 2021 とうみまち 2022 の比較を行う。

まず企画内容の違いについてである。うみまち 2021 では、新潟県外出身者の作家 8 組による作品展示やワークショップが行われた。また、キュレーターらによるトークイベントや互の市広場でのアートマルシェ等が実行委員会主導で行われた。うみまち 2022 では、「うみまち水族館」と「うみまち作品展」という二つの展示企画とワークショップを開催した。展示企画では、地域作家や上越市内の中学校・高校の生徒、周辺小学校や幼稚園・保育園の児童・園児たちの作品を展示した。うみまち 2021 とうみまち 2022 の双方には、作家の属性に違いがある。うみまち 2021 は県外作家のみで構成されていたのに対し、うみまち 2022 は、県内者のみで構成されている。また、作品の制作費の補助の有無でも、補助があったうみまち 2021 に対し、うみまち 2022 には補助がなかった。開催日時も相違点があり、うみまち 2021 では、平日も含む 58 日間、展示会場を開放していたのに対し、うみまち 2022 は、会期の土日祝日のみ 14 日間の開催となった。この違いについては、事業費の縮小が大きく影響しているが、本来は事業費ありきではなく、ターゲット層や目的に合わせて開催日時を検討するべきと考える。

次に関連イベントについてである。うみまち 2021 では、会期中に市民団体によってアートイベントが実施されるとともに、市民団体・直江津まちづくり活性化協議会・直江津商店連合会などが、スタンプラリーなどを実施した。うみまち 2021 の実行委員会では、直江津まちづくり活性化協議会には 100 万円、直江津商店連合会が企画した「アートと直江津（まち）を楽しむスタンプラリー」には 120 万円を予算配分した。ただし、これらのイベントは、ガイドマップやチラシ等への記載はなく、主催イベントのみの掲載となっていた。一方

---

<sup>29</sup> 新潟日報デジタルプラス (<https://www.niigata-nippo.co.jp/articles/-/16802>)

で、うみまち 2022 では、ホームページや SNS から会期中に直江津で行われるイベントを募集し、その中から認定されたものを連携イベントと位置づけ、「うみまちアート」の名前で一体的に情報発信を行なった。ガイドマップにも掲載し、主催イベントと同様に宣伝を行うとともに、実行委員がイベントスタッフで参加するなど、できる範囲内での協力を行なった。また、美術作品の展示に加え、楽器の演奏やダンス等のパフォーマンスもアートの一部と捉えることで、場所や人、ジャンルなどより広い範囲の事業をうみまち 2022 に取り込むことを試みた。一方で、アートプロジェクトの主軸が不明瞭となり、イベントの棲み分けや宣伝方法など、今後多くの改善が必要であると考ええる。

また、アートを直江津の歴史や資源・文化と融合させていくために、うみまち 2021 と うみまち 2022 のどちらにも、まちなかを回遊するイベントや屋台の展示など直江津をアピールする企画が行われた。その中で、うみまち 2022 では、実行委員である地域住民が来場者の対応を行なったことで、地域住民が直接直江津を伝える機会が生まれた。今後アートプロジェクトを通して、地域の魅力を伝える仕掛けを増加させることで、直江津独自のアートプロジェクトとして確立していく要因になると考える。

#### 4-4 コト（運営）の比較

この節では、目的、コンセプト、アートプロジェクトの実施形態について、うみまち 2021 と うみまち 2022 の比較を行う。

まず、目的の設定内容である。共通点として、目的の前半部分に、どちらも直江津の歴史や文化、風土などまちの魅力を引き出し、まちの賑わいを創出することが掲げられている。特に、うみまち 2022 の目的では、うみまち 2021 の趣旨を引き継ぐと明記していることから、上記の目的は、アートプロジェクトを直江津で開催する上で重要な考えであることが分かる。一方で、目的の後半部分はそれぞれ異なる内容となっている。うみまち 2021 の目的は、作品鑑賞等に訪れた方々が、まちを巡る中で新しい出会いや交流によって、まちの賑わいを創出するとあり、外から直江津に来てもらう事で相乗効果を生むことが期待されるとわかる。一方でうみまち 2022 の目的には、地域が関わる、地域で作る、地域の人が企画したものに参加して楽しむとあり、目標も、「うみまち 2022 の開催から地域の人・関係者・来訪者等がイベントを楽しみ、直江津の良いところを知る」を掲げている。このようにうみまち 2022 では、地域で行うことを重視し、地域の人を楽しめることを優先的に考えている。よって、直江津の魅力を通じてうみまち 2021 では外の人、うみまち 2022 では内の人を対象にした発信に重きを置いている。

次に、それぞれのコンセプトについてである。共通点は、うみまち 2021、うみまち 2022 とともに直江津の「うみまち」という特徴に着目し、アートプロジェクトの開催を行ったことであり、このうみまちという大きなコンセプトが引き継がれている。このことは、うみまち 2021 の実施主体である市外の人からみた直江津と、うみまち 2022 の主体である市内の人

から見た直江津の魅力や長所が一致していたことを意味する。また、うみまち 2022 は、名称やテーマカラーも うみまち 2021 を引き継いで開催しており、このことから「うみまち」というコンセプトに対し、地域住民の納得感があり、コンセプトに適していたことが伺える。「うみまち」をテーマにしたアートプロジェクト開催は、市民に地域の資源や魅力を再認識させ、元々存在していた「直江津を元気にしたい」という地域活性化に対する思いを行動に移すきっかけとなっている。

次にアートプロジェクトの実施形態から比較を行う。4-1 のヒトの比較で述べたように、うみまち 2021 では良品計画に関わりのある鈴木潤子氏がキュレーターとしてイベント全般のディレクションを担当し、うみまち 2022 では、キュレーターを置かずに開催した。キュレーターを依頼したうみまち 2021 の良かった点は、プロの参画により統一感のあるアートプロジェクトが実現した点である。また、うみまち 2021 で活用された直江津の良さや資源は、地元住民にとっては当たり前で気づきにくいものに着目しており、このことも県外者である鈴木潤子氏の参画による利点であると言える。一方で、うみまち 2022 の実行委員長にヒアリングをしたところ、鑑賞メインで開催されたうみまち 2021 は地域住民にとって敷居が高く、参加しづらい環境だったのではないかと主張する。このように、芸術にあまり触れたことのない人にとっては、地元でいきなりアートプロジェクトが開催されても、そこに関わることは困難であったと考えられる。キュレーターのいないアートプロジェクトでは、地域の人考えるその地域らしい魅せ方を行えることが利点として挙げられ、実際にうみまち 2022 においても、アートをより身近に感じることができ、市民をはじめ多くの人を楽しめる参加型イベントという直江津らしいアートプロジェクトを目指し開催された。しかし、キュレーター不在によりうみまち 2022 としての統一感が薄れてしまったという課題も存在する。

#### 4-5 小括

4章では、うみまち 2021 と うみまち 2022 についてヒト（人材）、カネ（資金）、モノ（企画）、コト（運営）の4点から比較を行ってきた。これらの比較からうみまち 2021 と うみまち 2022 には、運営主体や事業規模の面などにおいて相違点が見られることが明らかとなった。一方で、コンセプトなど変更されずに引き継がれた点が存在し、これらが活動の継続に有効に作用していたことも分かった。そこで5章では、それぞれの比較をもとにうみまち 2021 からうみまち 2022 へと継続していった要素を抽出し、アートプロジェクトを持続的に開催するための条件を明らかにしていく。

## 第5章 考察

3章では、うみまち2021とうみまち2022の概要整理を行い、4章では、両者を比較しながら、ヒト（人材）、カネ（資金）、モノ（企画）、コト（運営）の比較を行った。これらを踏まえ、5章では、アートプロジェクトを持続的に開催する条件および、今後の発展に必要な要素を検討する。

### 5-1 継続・発展に必要な要素

#### （1）専門人材の活用や潜在的な人材の掘り起こし

人材については、財源が潤沢にあるならば、外部キュレーターや外部アーティストの登用が可能である。外部のキュレーターやアーティストの登用は、新規性や創造性の持った企画内容、プロジェクト全体の統一感などの利点が考えられる。また、直江津および上越以外の外部との連絡調整、情報発信などに有効な役割を持つ。しかし、地域とのつながりが不明確であったり、合意形成が取れていない状態であったりすると、うみまち2021の開催後のような批判が生じる。そのために、アートプロジェクトは目的を明確にし、関わる人材すべてで共有し、外部人材の活用の場合はその役割も含めて合意形成を図っておかねばならない。

財源が限られているならば、地域住民の活用や、さらに潜在的な能力のある地域人材を掘り起こして登用することは、住民主体のアートイベントとして必要な要素である。今回のうみまち2022のように、財源が限られているからこそ、地域住民が知恵を絞り、積極的に地域住民を登用することで効率的な運営が実現している。さらに地域をよくしたいという情熱を持った人材の存在、強固な人的ネットワークを持ったコミュニティはプロジェクトの運営に好影響を与える。

#### （2）組織運営に必要な財源確保

2つ目に考える持続的なアートプロジェクトに必要な条件は、組織運営に必要な財源確保である。うみまち2021では、行政による財政的支援があったことで、外部キュレーターやアーティストを招致するとともに、事務局が安定して運営できた。また、ボランティアをコーディネートする専門人材も確保することができた。プロジェクトでは、会議の開催や書類の作成など、膨大な事務仕事が発生する。持続的な運営において、事務局機能の事業費は確保すべきと考える。1年だけのプロジェクトなら意欲のある人材がボランティアに関わることもできるかもしれない。しかし継続するためには、安定した事務局機能が不可欠である。そのほかに、開催期間に継続してアートプロジェクトに関わることができる人材の存在する組織運営は、安定したアートプロジェクトの開催に繋がるため、NPO法人の設立等も持続に有効的であると考えられる。

また事業費には招致するアーティストの費用に注目するケースが多いが、ボランティア制度を整備する人材の雇用に際して必要な費用も重要である。ボランティアは、参加者にとっ

て地域の歴史、文化などを理解する機会となり、地域のファンとなる可能性を含んだ人材である。うみまち 2022 ではなくなったが、持続するためには、復活が望まれる。

さらに財源の確保のために、多様な収入という観点も必要ではないのだろうか。1つの財源ではなく複数の収入源があれば安定する。例えば、行政の支援のほか、市民の寄付、企業協賛金、クラウドファンディング、物販など事業による収入などがある。こうした可能性も検討する余地がある。

### (3) 適切な展示や企画の作成

3つ目に考える持続的なアートプロジェクトに必要な条件は、適切な展示や企画の作成である。予算という制約の中で、企画を作ることになるが、その際、最も重視すべきはビジョンとの整合性である。ビジョンの実現を目指す中で、どのような企画を作ることが望ましいか、議論を行って決定することが必要である。うみまち 2021 は、行政や民間企業が実施主体であり、住民が主体であったうみまち 2022 とは、事業規模や客層など大幅な違いが生まれた。ビジョンがあいまい、または不明瞭であれば、アートプロジェクトの方向性が見えず、不安定になる要素となりうる。内在しているものも含め、地域の歴史や文化をより明確に用いることで地域資源が地域住民と関係者、来場者の共通認識となる。そして、地域資源の再認識や地域の魅力発見を反映させることはアートプロジェクトを持続的に行うことに繋がると考える。また、アートプロジェクトを通して地域の歴史や文化をより深く伝える仕掛けは来場者のみならず地域住民にとっても地域について学ぶことのできる場となり、アートプロジェクトと地域を連結する役割を果たすと考えられ、安定感の要因になると考察する。

### (4) ビジョン構築と明確なコンセプト

最後に考える持続的なアートプロジェクトに必要な条件は、なぜこのプロジェクトを実施するのか、明確な目的の設定や、実施することによってどのような効果が生まれるかを検討することである。特にそのプロジェクトによって何が実現されるのか、ビジョンを描くことが重要である。ビジョンの構築は、人材を巻き込むことに有効かつ公的な機関との連携を行う上で必要であり、資金を確保しながら一定規模の地域活性化のためのアートプロジェクトを持続していくために共通認識は必要となる。また、参加組織の増加に伴い、受益者が異なることで目的が多様化することもあるが、ビジョンや目的を確立しておけば、合意が得やすいと考える。

また、ビジョン構築のために、わかりやすい共通認識を含むコンセプトが必要になる。うみまち 2021 とうみまち 2022 において、直江津の内外どちらの人材から見ても納得感がある「うみまち」という共通コンセプトが引き継がれたように、地域に適したコンセプトの継続的な使用は、アートプロジェクトの持続にも影響を与える。コンセプトに使用する地域資源は、特別なものに限らず、普遍的な事柄でもよい。地域住民にとって、地域に存在する資

源は当たり前になっているものが多いため、アートプロジェクトのコンセプトとして活用するには俯瞰的に地域を観察できる外部人材が関わることを望ましい。地域住民が地域の資源であると気づき、または再認識し、地域活性化に活用していくことが理想である。それらがアートプロジェクトを持続的に行うことに繋がると考える。

## 5-2 小括

最後に、うみまち 2021 とうみまち 2022 の比較を通じて、アートプロジェクトの開催において特に重要だと感じたことを記述する（図 6）。

まずは合意形成の重要性である。合意形成を丁寧に多く行うことは起こりうる批判を事前に防ぐことへと繋がり、持続的な開催に欠かせないと考察する。うみまち 2021 では解禁情報の制限など合意形成が困難な状況があり、地域住民が参加しにくいとの声があった。一方でうみまちミーティングなど、より多くの合意形成の場を設けたうみまち 2022 ではより多くの地域住民が参加し、住民主体のアートプロジェクト開催へと繋がった。また、うみまちミーティング等における、地域住民と共いうみまち 2022 を作り上げていきたいという運営主体の意思表示は、地域住民の参加に寄与するだけでなく、会期中の来場者に対する対応など細部に影響を及ぼし、アートプロジェクトとしてのなおえつうみまちアートの確立に欠かすことができないと考察する。

さらにコンセプトなど、共通認識を継承することも重要である。うみまち 2022 では、なおえつうみまちアートという名称を引き継いだことが結果的に合意形成の役に立っており、名称やロゴなど住民の印象に残っているものを引き継ぐことも持続の要素になりうると言える。そのために共通認識の要素であるビジョンや目的、コンセプトなどを継続に値する明確なものへと練り上げる必要があると考察する。

そのほかに、地域コミュニティが強固であり、かつ地域住民が地域を良くしていきたいという強い意志を保有している場所でアートプロジェクトを開催することは、地域活性化に対する動きを活発なものにすることに加え、主体的にアートプロジェクトに関わってくれる地域住民の発掘やその補完的役割を担うことから、持続するアートプロジェクトにおいて欠かせない要素の 1 つではないかと考察する。

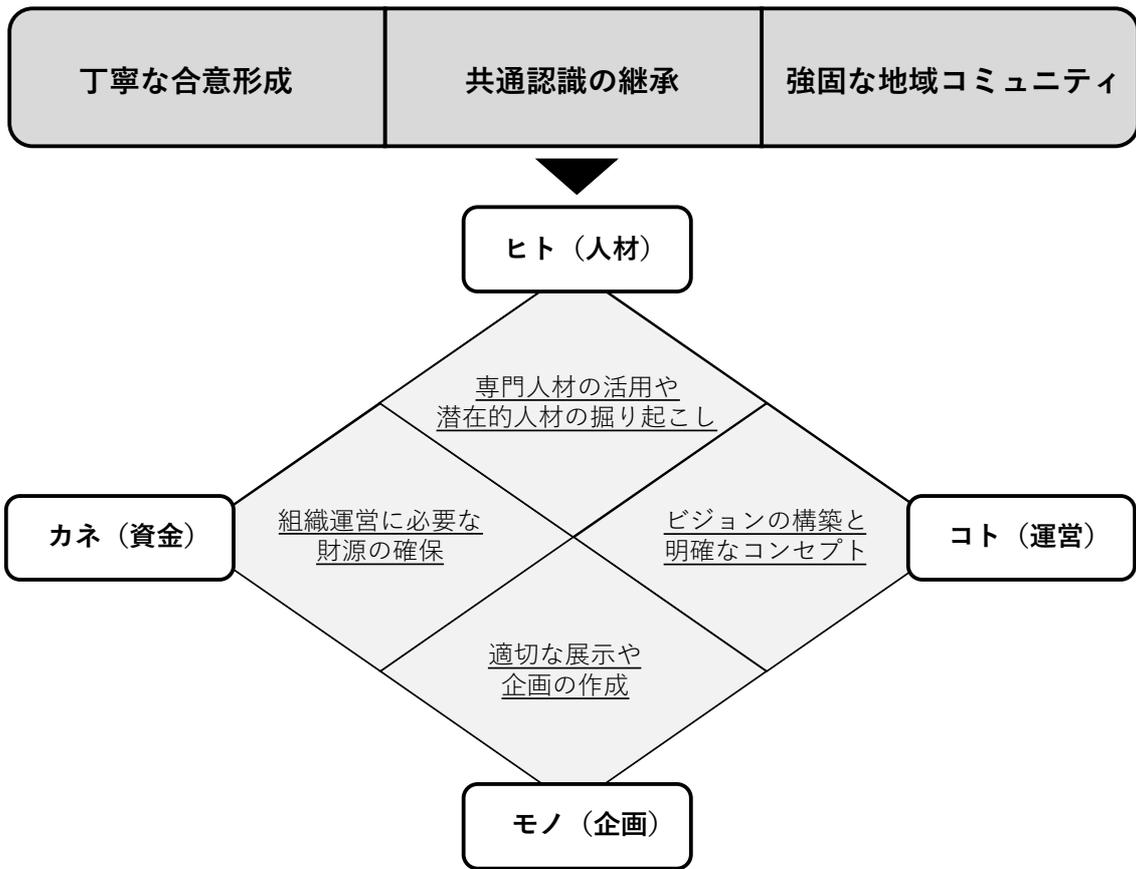


図 6 持続するアートプロジェクトの条件 (著者作成)

## 第6章 おわりに

本研究から、アートプロジェクトは地域住民が地域の価値を再認識できる機会であるとともに、地域住民が地域活性化の手段としてアートプロジェクトを認識することで、より活発な活動に繋がっていることが分かった。実際に直江津においても、アートプロジェクトという新しい取り組みにより賑わいが創出され、市民の地域活性化に対する活動に影響を与えていた。また、アートプロジェクトを地域で持続させていくためには、開催地の地域性や開催に関係していく人材の特徴、地域内のアートプロジェクトに対する意識など様々な条件が関係していることが明らかになった。

一方で、うみまち 2021 にて当初検討されていた大地の芸術祭との連携や新型コロナウイルスによる影響について本研究ではほとんど触れていない。広域に渡る繋がりや構築や感染症のパンデミック時におけるアートプロジェクトの適切な対応などについて言及できなかったため、今後の課題としたい。

さらに、今後アートプロジェクトを持続させた上で発展させていくためには、開催地ごとの特色を深く考える必要があり、本研究で取り上げたなおえつうみまちアートの事例についても具体的な対応の考察がより重要になると考えられる。なおえつうみまちアートが地域に根付き、地域内外問わずすべての人に対し直江津の魅力を伝えることができるアートプロジェクトとして発展していくことを願うと共に、一市民としてなおえつうみまちアートに関わり続けていきたいと思う。

## 謝辞

本論文において、執筆にあたり献身的にご指導していただきました卒業研究指導教員の安嶋是晴先生に心から感謝申し上げます。

また、ヒアリング調査にご協力いただいた、上越市企画政策部企画政策課の志賀陽一氏、丸山輝子氏、上石剛士氏ならびに、なおえつうみまちアート 2022 実行委員長の重原稔氏、また、快く調査にご協力いただいた、なおえつうみまちアート 2022 実行委員会、事務局の皆様および直江津地区の住民の皆様にご尽力、ご協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

最後に、ゼミのメンバーをはじめ、本論文の作成にあたり関係して下さった全ての方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 参考資料

- ・熊倉純子監、菊池拓児・長津結一郎（2014）『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社
- ・松尾豊（2015）『パブリックアートの展開と到達点 -アートの公共性・地域文化の再生・芸術文化の未来-』水曜社
- ・古賀弥生（2020）『芸術文化と地域づくり -アートで人とまちをしあわせに-』九州大学出版会
- ・宮本結佳（2018）『アートと地域づくりの社会学 直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造』昭和堂
- ・荻原康子・熊倉純子（2001）「社会とアートのえんむすび1996-2000：つなぎ手たちの実践」ドキュメント2000プロジェクト実行委員会
- ・（1985）『わが郷土上越 -上越市の風土と生活-』新潟県社会科教育研究会・上越市中学校長会、1985
- ・渡辺慶一・中村幸一監（1971）『直江津の歴史』直江津市教育委員会
- ・大地の芸術祭ホームページ  
(<https://www.echigo-tsumari.jp/about/history/>)
- ・ベネッセアートサイト直島  
(<https://benesse-artsite.jp/about/history.html>)
- ・上越市ホームページ  
(<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/shiminka/jinko.html>)
- ・頸城自動車株式会社 ホームページ (<https://www.marukei-g.com/publics/index/37/>)
- ・株式会社 良品計画 ホームページ (<https://www.ryohin-keikaku.jp/corporate/>)
- ・直江津商店連合会ホームページ (<https://naoetsu-shoren.com/about/>)
- ・Schoo 先生一覧 (<https://schoo.jp/teacher/2775>)
- ・新潟日報デジタルプラス  
(<https://www.niigata-nippo.co.jp/articles/-/16802>)
- ・上越市ホームページ 地域活動支援事業 令和4年度採択事業一  
(<https://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/221575.pdf>)
- ・上越市の地域自治区制度  
(<https://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/186357.pdf>)
- ・直江津祇園祭ホームページ スケジュール  
(<https://www.naoetsu-crs.com/gionsai/schedule/>)
- ・直江津地区連合青年会 直江津のスポット  
(<https://www.naoetsu-crs.com/gionsai/schedule/>)
- ・上越タウンジャーナル (<https://www.joetsutj.com/articles/54315101>)